

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	九州大学	
取組学部・研究科等名	大学院総合理工学府	
構想名称	エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協働教育プログラム	
海外の相手大学	【中国】	上海交通大学機械与動力工程学院・環境科学与工程学院
	【韓国】	釜山大学校工学研究科機械工学専攻・環境工学専攻

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

＜目 次＞

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	4
	基準 2－2 教育内容・方法	6
	基準 2－3 学習・生活支援	8
	基準 2－4 単位互換・成績評価	10
	基準 3 学習成果	12
	基準 4 内部質保証システム	13

＜付録＞

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

本プログラムでは、エネルギー環境理工学分野においてグローバルに活躍できる高度研究者・技術者の育成を明確な目的として定め、参加3大学の共通認識の下で、育成する人材の具体像が明確にされている。ダブル・ディグリーの授与が本プログラムの目標として据えられ、3大学間で文書により共通理解が図られており、進展している。

プログラムの目的を達成するために、3大学間の国際PDCA委員会が設置されているとともに、各大学内に共通して国内PDCA委員会が整備されている。また、プログラムの実施にかかる基本方針が協定書に記載されており、体制の構築が進展している。教育内容・方法については、ダブル・ディグリーの取得を目指した「エネルギー環境理工学国際コース」において、専門教育カリキュラムや修士論文研究等の教育内容が、参加大学間で共同して検討・実施されていることは、進展している取り組みである。学習・生活支援では、九州大学に受け入れる学生に対しては、学生サポーターの配備をはじめ、各種の学習・生活面の支援が実施されている。中国・韓国の相手大学へ派遣する学生に対しても、事前の英語講座の提供や現地への出張による学習支援など、学習・生活両面の支援が充実しており、進展している。単位互換では、上限数が参加大学間で確認されているとともに、1単位の考え方について3大学間で合意されている。さらに、3大学間の成績評価の換算表を作成の上、相互に認定することで合意し、実際に運用が図られていることは、進展している取り組みである。

優れた取り組み

- ・ 本事業では、エネルギー環境理工学分野において、グローバルに活躍できる高度研究者・技術者を国際連携の下で育成するという明確な目的を定め、この目的達成の為に、九州大学、上海交通大学、釜山大学校がダブル・ディグリープログラムの協働開発に取り組んでいる。エネルギー環境問題への人材育成プログラムをエネルギー環境問題の現場であるアジアで実施・展開し、世界に向けて発信することを共通目標とし、共通認識が得られている。
- ・ 受入れた外国人留学生に対して、研究室では他の学生と同様に学べる環境になっているだけでなく、学生サポーターの配備、日本語・英語教育の実施、その他生活面での各種支援を提供している。あわせて、履修科目の助言など、学生に対して適切な履修指導を行っている。
- ・ 単位互換／移管に関しては、留学先での取得単位の互換の上限数を含めて、各大学の諸規定で定められている。1単位の考え方についても、3大学間で合意されている。成績評価については、各大学で運用している成績評価の換算表を作成し、評点に基づき成績を相互に認定することで合意している。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

本プログラムでは、エネルギー環境理工学分野においてグローバルに活躍できる高度研究者・技術者の育成を明確な目的として定め、参加3大学の共通認識の下で、育成する人材の具体像が明確にされている。ダブル・ディグリーの授与が本プログラムの目標として据えられ、履修の方法や学生の受入れなどのプログラムの具体の設計に関して、3大学間で文書により共通理解が図られている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本事業では、社会的・学術的な必要性のもとでエネルギー問題とそれに関係する環境問題に関わる科学と技術（エネルギー環境理工学、EEST）分野において、グローバルに活躍できる高度研究者・技術者を国際連携の下で育成するという明確な目的を定めている。

この目的達成の為に、九州大学、上海交通大学、釜山大学校が協働開発し、エネルギー環境問題への人材育成の取り組みをエネルギー環境問題の現場であるアジアで実施・展開し、世界に向けて発信することを共通目標とし、共通認識が得られている。

（優れている理由）

本プログラムの実施にあたっては、参加する各大学の学問分野の強みが生かされ、学際性に富んだ国際協働のプログラムが組み立てられている。3大学が立地する都市の地理的な近さを利点として、緊密な交流が図られている。中国と韓国の相手校は、沿岸地域の大都市にあり、環境問題の現実感があるため、意識の高い学生が集まることが期待される。

各大学のカリキュラム／ディプロマポリシーとの整合性を確保し、最終的にはダブルディグリー授与という明確なゴールが共通目標として設定されており、そのための協定書が参加大学間で合意され発足している。

（優れている理由）

異なる国・地域とのダブル・ディグリー授与を目指すことが共通目標として設定され、参加大学間で文書により合意されている点は、優れている。将来的にジョイント・ディグリープログラムの構築を視野に入れながら、現時点では共同性の高いカリキュラムを構築し、ダブル・ディグリープログラムの実施に至ったこと、またそのために3大学間で濃密な議論が積み重ねられてきたことは、優れた取組みである。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 地理的に近いこともあり、頻繁に会合を重ねることが関係者の信頼関係の構築に効果的で、

それが実践されていると感じられる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

特になし

基準 2 教育の実施

基準 2-1 実施体制

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

プログラムの目的を達成するための調整や運営について議論する体制として、3大学間に国際 PDCA 委員会が構築されている。また、各大学内には、国内 PDCA 委員会という形で共通した実施体制が整備されており、意欲的な試みである。プログラムの実施に際して、運営体制や学生に対する責任、経費の配分等の項目があらかじめ基本方針として協定書に記載されている。プログラムの実施のために、国際的な対応能力のあるスタッフが確保され、また、教職員のスキル向上のための取組みが行われている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

ダブルディグリーを目指した3大学間の学生交流協定が合意発足され、平成25年度からダブルディグリーを目指した交換留学が本格実施される。

当プログラムの基本方針（運営体制、学生に対する責任、経費の配分など）が協定内で明確化され、効果的に機能している。

（優れている理由）

3大学間で頻繁な意見交換の場が持たれ、参加3大学間の双方向的なダブル・ディグリーを目指した協定として合意に至ったことは優れている。なお、ダブル・ディグリー学生の派遣・受入れは平成25年度より開始されている。

各大学内に国内 PDCA 委員会を、また3大学からの代表者で構成する国際 PDCA 委員会を創設し、プログラム運営について、必要な協議を行い、それを実施している。

（優れている理由）

プログラム全体の PDCA サイクルを動かすことを基本的使命とする組織が整備され、プログラムの細部に至るまでの協議・調整が行われている。また、参加する各大学でそれぞれ主体的に PDCA サイクルを動かすことは重要であり、そのための委員会が各大学に共通して設置されている点は優れている。

当プログラムの構想責任者の他、十分に国際的な対応能力を有する専任教員3名（うち、中国籍・韓国籍の教員各1名）が配置されており、プログラムの推進及び教育業務を適切に遂行している。教職員の国際的な対応能力の向上の為に、各種支援の取り組みを学内で実施し、教職員のスキルアップを推進している。

(優れている理由)

国際的な対応能力を有する教員、特に中国籍・韓国籍の専任教員が配置されており、円滑なプログラム運営を遂行するための強みが発揮されている。また、学生のレベルアップとともに教職員のスキル向上に継続的に取り組む体制が全学的に整備されていることは、優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

特になし

基準 2-2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

ダブル・ディグリーの取得を目指した「エネルギー環境理工学国際コース」を平成 25 年度に開始すべく整備が図られた。同コースの開設に際し、3 大学共通の育成する人材像に基づき、専門教育カリキュラムや修士論文研究、異文化理解のための教育等の教育内容が、参加大学間の共同で検討されている。特に、各大学修士課程の標準修業年限内に、課程修了と 2 つの学位取得を実現させるため、短期集中プログラム（サマースクール）のカリキュラムを 3 大学共同による必須科目として導入し、半年間の相手大学への留学期間となるよう調整されている。サマースクールでは、参加 3 大学の学生のみならず教員も集い、共同性の高い教育・研究指導が行われ、また、日本や韓国では、エネルギー環境理工学に関する企業見学も実施されている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

サマースクールを 3 大学共同開催として実施するほか、エネルギー環境理工学に関連する企業見学（LG 電子・韓国、三菱重工業・日本）などを実施し、プログラム目的に即した効果的な教育方法がとられている。

（優れている理由）

サマースクールは、3 大学の学生と教員が 1 か所に集まり、3 大学共通の科目として設置されている。このように、共同性の高い教育・研究指導のカリキュラムが組まれていることは優れている。企業見学では、各国の産業の強みを生かしたプログラムが生まれ、日本のみならず韓国でも展開されていることは、意欲的な取り組みである。参加した学生の感想から、各国の企業についての見識が深まるといった効果が得られていることが確認されている。

九州大学においては日本語・日本文化教育、実践英語教育を、釜山大学校では韓国語と英語を、上海交通大学においては中国語と中国文化論の教育を行い、異文化体験、国際経験/交流に資することとしている。

（優れている理由）

それぞれの言語学習、文化教育は重要であり、各大学で工学系の専門的な分野の学修にとどまらず、3 大学共通で各国の言語や異文化体験等も行うこととなっている点は、プログラムの目的に適っており、優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

ダブルディグリー取得のためには、各大学での必修授業科目の選定等に調整が必要である。

○コメント

- ・ 平成 25 年度よりダブル・ディグリー取得を目指した「エネルギー環境理工学国際コース」を設置することとなっているが、学府規定により必修科目が整備されていることをモニタリングの訪問調査で確認した。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

九州大学に受け入れる学生に対しては、学生サポーターの配備をはじめ、各種の学習・生活面の支援が提供されている。履修指導に関しても、学生に希望の研究室を留学前に提出させ、受入れ教員と相談の上で、研究室配属の調整がなされている。中国・韓国の相手大学へ派遣する学生に対しては、事前の英語講座の提供や現地への出張による学習支援など、学習・生活両面の支援が充実している。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

受入れた外国人留学生に対して、履修指導、学生サポーターの配備、指導教員の配置、日本語・英語教育の実施、その他生活面での各種支援を適宜実施した。

研究室では他の学生と同様に学べる環境になっているだけでなく、サポーターを配置し、支援体制を整備している。あわせて、履修科目など、学生に対しての適切な履修指導を行っている。

(優れている理由)

受入れ学生に対して、来学前から来日直後、留学中にかけて、学習・生活支援の体制が整備されている。特に学生サポーターに関しては、各種の支援にとどまらず、受入れ学生との日々のコミュニケーションを通じて、学生同士の交流が深められており、優れた取組みといえる。

自大学から派遣する学生に対して、事前実践英語教育の実施、派遣先での学習面でのフォローのために TV 会議や現地への出張などで学習支援を実施した。

(優れている理由)

日本からの派遣学生に対して、留学開始前における中国籍・韓国籍のキャンパス・アジア専任教員によるオリエンテーションや履修登録等の支援、留学中の生活相談、留学状況の調査訪問等、学習・生活両面の支援が幅広く行われており、優れている。留学前に実施される英語教育に関しては、受講した学生が英語に対する自信を深めるなど、取組みの効果がうかがえる。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 国際化の基盤が充実しているので、キャンパス・アジア事業であっても特段何かが必要ということなく、大学としての体制が整備されている強みが生かされればよい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

日中韓の奨学金支払い額（80,000 円、900,000 ウォン、1,700 人民元）が大きく異なる。特に中国での奨学金が少なく、現地の物価に換算すると概ね同じになるとはいえ、不平等感が残る。韓国では釜山大学校から上海交通大学への留学生に対して補完をしていると聞いている。

○コメント

- ・ 経済状況が根本的に異なる3国の間で公平な手当てを実現するのは至難の業だろう。学ぶ場所も異なるのであれば、金額的な差異にはこだわらない姿勢も大事ではないか。
- ・ 受け入れ体制と奨学金支給の原則ははじめからのルールであるので、こうした大学間交流にも慣れる必要がある。将来グローバル人材として働くときの現地の給与水準をどう考えるか、という課題とも関わるので慎重に議論をしていきたい。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

キャンパス・アジアの成否の一つは、プログラムによって履修した科目の成績評価や単位互換の考え方を相手側大学との協議により、相互に整理・確認することである。その点で、本プログラムでは、単位互換／移管に際しての上限数を参加大学間で確認し、1単位の考え方について3大学間で合意されている。成績評価については、3大学間の成績評価の換算表を作成の上、相互に認定することで合意し、実際に運用が図られている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

単位互換／移管については、留学先での取得単位の移管または互換の上限数を含めて、各大学の諸規定で定められている。1単位の考え方についても、3大学間で合意されている。成績評価については、各大学で運用している成績評価の換算表を作成し、評点に基づき成績を相互に認定することで合意している。(例えば、九州大学の95点(評定：秀)は釜山大学校のA⁺(95～100点)に認定)

(優れている理由)

単位互換／移管の原則について3大学で協議し、1単位の考え方を含めて仕組みが整備されていることは、優れている。成績評価については、3大学間で成績評価の考え方が換算表の形式で具体的に共有されるとともに、3大学の教員が集まった際に、教員間で成績の付け方の検証が行われている。以上のことは、他の国際交流プログラムの参考となる、優れた取組みである。なお、ダブル・ディグリー授与のためには、英語の修士論文1編を執筆することが3大学間で合意されている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

修士論文の判定に関しては、さらに詳細を定める必要がある。

○コメント

- ・ 修士論文の審査は方法だけでなく本質的な部分で異なる可能性が大きいので、現状の審査会を相互に見学するなどして十分に理解をすることが重要と思われる。
- ・ 学生の論文にかかる中間発表・最終論文発表時に自大学及び留学先の教員が同席し審査を行う点は、学生の教育ならびに結果としての修士学位の取得に対して、3大学の学位授与方針を尊重しつつも、連携して取り組むべきこととして高く評価できる。
- ・ 判定プロセス・手法については早急に具体化の上、学生への適切な情報提供を行うとともに、九州大学内のみならず、他のダブル・ディグリープログラム実施大学とも、取組事例の共有を図っていただきたい。

基準 3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

共同カリキュラム化されたサマースクールにおいては、学習成果の評価法について3大学が相互に確認し、参加学生への共通の評価が実施されるなど、3大学共同の取り組みがなされている。サマースクール等の参加学生に対するアンケート調査も実施されている。今後、学生が何を身につけたかといった学修の成果やプログラムの付加価値に着目したアンケートの工夫や、教員に対する学生の派遣効果を問うアンケートなど、学習の効果測定のための取組みが多面的に進められることを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

個々の成績、修士論文の評価など、個々の学生への学習効果、個々の大学における学習効果の評価に問題はないが、全体として本プログラムが目指す人材育成に添った学生像が具現化できたかどうかについて、その成果をどのように問うかについては、3大学間で更なる協議が必要である。

○コメント

- ・ それぞれの大学が提供可能な科目を並べることでスタートするのはやむを得ないとしても、定期的な見直しにより、プログラムにふさわしい構成とすることを継続的に検討することが望ましい。
- ・ 指摘のとおりで、各大学に設置されているPDCAサイクルの組織をどう活用すればこうした人材としてのアウトカムを評価確定できるかが少しでも解明できると思われるがいかか。
- ・ 現在多くの大学において、国際交流プログラムによる学生の学習成果測定・手法は議論途上の段階にあるのが一般的な状況といえる。今次プログラムにおける成果測定の設定については、さらに困難な3大学の間での取組みによって進めている点に高い先進性がある。したがって「成果をどのように問うか」は今後も中心課題に位置づけ、しっかりと継続して議論をいただき、具体的に「問う」、「測る」ための仕掛けを考え、段階的でもよいので実践いただきたい。また、それらの営みが、結果として九州大学の更なる国際交流プログラムの飛躍へとつながるだけでなく、他大学の参考例にもなるものと思われるので、大いに期待したい。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

サマースクール等のプログラム参加学生に対するアンケートが実施され、学生の満足度等の確認がなされている。各大学内に国内 PDCA 委員会が、また 3 大学間で国際 PDCA 委員会が設置され、プログラムの運営について必要な協議が行われている。また、外部有識者を招いた九州大学国際交流総合企画会議により、本プログラムの当初計画に基づく達成内容のレビューが行われている。また、産業界関係者等が集う地元のフォーラムで本プログラムについて共同で説明するなどの広報活動が行われている。キャンパス・アジアプログラムの認知度は、学生のキャリア支援や、プログラムの継続性に関わる重要な視点であることから、今後も、外部有識者による評価に意欲的に取り組むとともに、広報・普及活動を通じて本プログラムの一層の認知度の向上に努めていきたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題に対するコメント**○大学が指摘した課題**

平成 25 年度からのダブルディグリープログラムの本格実施により顕在化してくる問題や解決・改善事項があれば、国際 PDCA 委員会で議論し、適宜修正をはかる必要がある。

○コメント

- ・ 国際 PDCA 委員会の開催頻度、運用形態については、実際に学生を受入れはじめてからも継続的に検討することが望ましい。

「キャンパス・アジア」モニタリング 自己分析書

平成25年5月

「エネルギー環境理工学グローバル人材のための
大学院協働教育プログラム」

九州大学

＜目 次＞

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況	
1. 基本情報	1
2. 構想の目的、概要、進捗状況	1
II 基準ごとの自己分析	
基準1 教育プログラムの目的	5
基準2 教育の実施	
基準2-1 実施体制	6
基準2-2 教育内容・方法	7
基準2-3 学習・生活支援	8
基準2-4 単位互換・成績評価	9
基準3 学習成果	10
基準4 内部質保証システム	12

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況

1. 基本情報

1. 大学名	九州大学	
2. 構想名称	【和文】	エネルギー環境理工学グローバル人材育成の為に大学院協働教育プログラム
	【英文】	Cooperational Graduate Education Program for the Development of Global Human Resources in Energy and Environmental Science and Technology
3. 取組学部・研究科等名	大学院 総合理工学府	
4. 海外の相手大学	【中国】	上海交通大学(SJTU)
	【韓国】	釜山大学校(PNU)

2. 構想の目的、概要、進捗状況

○構想の目的及び概要

【これまでの取組みと背景】

アジアに向けた海港都市福岡に位置する総合大学として、九州大学は、アジアをはじめ広く全世界で活躍する人材を輩出してきた。日本及び世界の発展に更なる貢献を果たすことを目的に、「人間性の教育」「社会性の教育」「国際性の教育」「専門性の教育」を教育理念に掲げ、平成23年5月1日現在1,866名の留学生のうち89.7%をアジア地域から政策的に受入れるなど、地理的・歴史的な特性を活かしたアジア重視戦略を展開し、アジアを代表する世界的研究・教育拠点大学となることを目指している。特に、本構想の中心となる総合理工学府では、平成20年に採択された環境負荷なき炭素資源利用の21世紀型パラダイムの構築と人材育成に取り組むグローバルCOE「新炭素資源学」を中心に、中国、韓国等の大学と双方向型研究・教育交流の中で優秀な若手研究者の人材育成を行ってきた。

【構想の目的】

上記のような実績を基に、本構想では、エネルギー問題とそれに関係する環境問題に関わる科学と技術(以降「エネルギー環境理工学」という。)分野において、将来グローバルに活躍できる高度研究者・技術者を国際連携の下で育成するためのダブルディグリー理工系大学院協働教育プログラムを、九州大学(日本)、上海交通大学(中国)、釜山大学校(韓国)が共同開発し、本格的に実施することを目的とする。また、将来的には、本プログラムの成果に基づき、ジョイントディグリー制度による国際連携大学院を設立展開し、更に日中韓大学コンソーシアムを拡大する。

【構想の概要】

- ① 本プログラムにおいて育成を目指す「エネルギー環境理工学グローバル人材」の具体像は、
 - (1) 専門分野の深い知識の修得とそれに基づく研究開発能力
 - (2) エネルギー環境問題の現状の理解と発展的考察力
 - (3) グローバルに活動するために必要な英語力
 - (4) グローバル化時代に求められる研究者・技術者倫理、異国の文化・人・社会の理解を備えた人材である。
- ② 大学院協働教育プログラム: 上記人材の育成のために、エネルギー環境理工学分野の深い専門性とその国際的な応用展開能力の涵養をポリシーとする理工系大学院協働教育プログラムを構築する。本プログラムは、使用言語を英語とした修士課程国際コースで、「専門教育カリキュラム」、「エネルギー環境理工学カリキュラム」、「修士論文研究」で構成する。本プログラム固有に新設するエネルギー環境理工学カリキュラムでは、インターンシップ科目、課題解決型科目、知財を含む技術者・研究者倫理科目等を設定し、3 大学合同でコース修了証明証を授与する。さらに、単位互換を活用した専門教育科目の単位認定、修士論文研究の共同審査方法を確立し、ダブルディグリーを授与するプログラムである。各年度のコンソーシアム全体の学生交流規模は、財政支援対象の交換留学生 30 名、サマースクールへの参加学生 60 名を基本とする。
- ③ 質保証を伴ったカリキュラム体系の設計と成績管理、学位授与の統一的実施: 日中韓大学コンソーシアム内、各大学に設置するPDCAリーダー委員会、PDCA委員会の主導のもと、各大学のカリキュラム／ディプロマポリシー、単位互換や単位・学位授与に関する法制度との関係を慎重に考慮しつつ、シラバス・成績評価基準の共通化、共同教材の開発や共同講義による教育方法・レベルの標準化、単位認定と学位授与の審査の共同・統一化、出口管理の徹底等により、3 大学の質保証の伴ったカリキュラム体系の構築を、取り組み内容をホームページで公開すること等により透明性をもって推進する。
- ④ 日中韓の学生へ魅力的なプログラム提供: 参加学生に対して、グローバル性の涵養のみならず、アジアを中心とするグローバルなキャリアパス形成を可能とするために、各大学において、留学が就職の障害とならないような就職情報の提供やメール相談を行うとともに、参加学生への企業からの冠奨学金等の獲得など修学支援・就職支援・生活支援を強化し、日中韓の参加学生を全面的にサポートする。

○平成24年度末までの取組状況

- ① H23 年 3 月 当プログラムキックオフイベントとして 3 大学総長、副学長列席の下 MOU 協定の調印式を行い、正式にプログラムを発足させることが出来たと共に、3 大学教員、学生を招いてのキャンパスアジアスプリングセミナーを開催し、次年度以降のプログラム展開への大きな弾みとなった。
- ② キックオフイベント並びに PDCA リーダー委員会において、本プログラムで今後用いる英語名称を「**E**nergy-**E**nvironmental **S**cience and **T**echnology, **A**dvanced **S**chool of **I**nternational **A**lliance」、略称を「EEST ASIA」とすることで同意した。
- ③ H24 年4月 キャンパスアジアオフィスの体制整備が完了したことで、本プログラム推進が可能になると共に、この体制構築により、学内・学外連携体制、学内諸規則の整備など本事業に必要な協議・折衝を開始した。

- ④ H24年4月～7月、11月～2月 実践英語教育を実施し、留学生及びサマースクール参加学生の英語力向上を図ると同時に、定期的に TOEIC を受験させ、TOEIC スコアによる英語教育の効果を探ることとした。併せて教室での教育に加えて H23 年度導入済みであった E-learning system (ALC TOEIC2000) を利用し、自宅個人学習を併用した。
- ⑤ H24 年8月 3大学の合意のもと、学生交流協定を調印・発足(8/20)させた。これにより、サマースクールへの参加、およびダブルディグリープログラム構築の先行・試行として半期の交換留学の実施が可能となった。
- ⑥ H24 年8月 釜山大学校が主催したサマースクール(8/16～26日)へ参加のため21名の学生を派遣した。サマースクール開催にあたっては、共同準備を行うと共に、実施状況、学生の修得度などを分析・評価し、その効果、あるいは改善課題を抽出し、来年度以降、ダブルディグリーのための本格実施に資することとした。サマースクール渡航前に実施した参加学生対象にオリエンテーションを開催し入念な情報提供を行ったとともに、期間中には九州大学からキャンパスアジア専任准教授(韓国籍)を釜山大学校に常駐させたことで、不慮の事態へも対応出来る体制を整えることができた。サマースクール受講生に対してはその成績を評価した上で、3 大学プログラム責任者の連名で修了証の授与を行い、受講者の益をはかると共に、学生のモチベーション向上をはかった。
- ⑦ H24 年9月～1月 本プログラムの骨格となる交換留学を開始し、九州大学より、釜山大学校、上海交通大学に各3名の学生を派遣、また逆に各校より3名ずつを受入れた。留学生は留学先大学での指導教員の研究室に配属し、セミナー、実験/演習等により、エネルギー環境理工学関連の専門知識及び異文化の理解促進を図った。九州大学では、平成 25 年度よりエネルギー環境理工学国際コースを学府内に設置することとし、そのコースのための英語開講授業科目を設定し、留学生に受講させた。
また、交換留学終了後には3大学プログラム責任者の連名で修了証の授与を行い、学生の益を図ると共に学生のさらなるモチベーション向上を目指した。
- ⑧ H24 年11月 ダブルディグリー同時取得をめざした「エネルギー環境理工学国際コース」を九州大学総合理工学府内に設置するための諸規則整備等を完了した。これにより H25年度より「エネルギー環境理工学国際コース」へ学生を配属させ、ダブルディグリー取得を目指した大学院協働教育プログラムを本格的に開始する事が可能となった。
- ⑨ H24 年度後期 キャンパスアジア専任教員(韓国籍・中国籍)が釜山大学校、上海交通大学に適宜出張し、派遣中の九州大学学生への状況把握及びフォローなどを行い、生活面・精神面・勉学面のサポートをおこなった。実際に派遣先を訪問し学生と面談することで学生が抱える問題、不具合点などが明らかになり、先方大学への交渉・打開策要求が可能となり、学生へのきめ細やかな対応が出来た。
- ⑩ H25 年2月 ダブルディグリーの導入に対し、3 大学間で合意が得られたので、これを実施に移すための協定書を作成、3 大学代表者による署名を得て発足させた。
- ⑪ H25 年2月 広報、普及活動の一環として、福岡市、釜山広域市の財界トップの会議である「釜山-福岡フォーラム」においてキャンパスアジア EEST の紹介を行った。
- ⑫ H25 年2月 当初11月に開催予定であった CSS/オースタムセミナーを諸事情により2月に延期し、釜山大学校、上海交通大学の学生/教員を招き、CSS EEST セミナーとして開催した。学生による英語による研究発表を通して企画力・プレゼンテーションスキル向上をめざした。
- ⑬ H25年2月 PDCA 委員会による内部評価並びに九州大学国際交流総合企画会議による外部評価を実

施した。本取り組みへの客観的な評価により課題・問題点などが抽出可能となり、来年度以降のダブルディグリー本格実施に向けた具体的な活動計画・対策が立案された。

- ⑭ H25年2月 PDCAリーダー委員会を開催し、24年度事業総括を実施した。
- ⑮ 通年 国内PDCA委員会(九大キャンパスアジア委員)、及び国際PDCA委員会(3大学の構想責任者及び各教職員)を適宜開催、及び交換留学生を交えたTV会議を実施した。
- ⑯ 通年 HP(<http://www.tj.kyushu-u.ac.jp/campus-asia/>), FB(<http://www.facebook.com/kucampus.asia>)、各種パンフレット、福岡釜山フォーラムなどの機会や媒体を利用して本取り組みの広報活動を実施し、周知度増加、プログラム促進へと大きく貢献した。
- ⑰ H25年度前期に受入れる学生の入学を許可し、ダブルディグリー取得にむけた学生受入の準備を行った。
- ⑱ 平成24年度までの事業を総括したうえで、中間報告書を作成し、関係大学、関連部署に送付した。

Ⅱ 基準ごとの自己分析

基準1 教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

1. 基準1に係る現況の説明

- ・本事業では、社会的・学術的な必要性のもとでエネルギー問題とそれに関係する環境問題に関わる科学と技術(エネルギー環境理工学、EEST)分野において、グローバルに活躍できる高度研究者・技術者を国際連携の下で育成するという明確な目的を定めている。
- ・この目的達成の為に、九州大学、上海交通大学、釜山大学校が協働開発し、エネルギー環境問題への人材育成の取り組みをエネルギー環境問題の現場であるアジアで実施・展開し、世界に向けて発信することを共通目標とし、共通認識が得られている。
- ・**3大学共通認識のもと**、本プログラムで育成を目指す「エネルギー環境理工学グローバル人材」の**具体像**(①専門分野の深い知識の修得とそれに基づく研究開発能力、②エネルギー環境問題の現状の理解と発展的考察力、③グローバルに活動するのに必要な英語力、④グローバル化時代に求められる研究者・技術者倫理、異国の文化・人・社会の理解を備えた人材)が明示されている。
- ・各大学のカリキュラム／ディプロマポリシーとの整合性を確保し、最終的には**ダブルディグリー授与**という明確なゴールが共通目標として設定されており、そのための協定書が参加大学間で合意され発足している。

以上のように、基準1に対しては「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

特になし

基準 2 教育の実施

基準 2－1 実施体制

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

1. 基準 2－1に係る現況の説明

- ・ **ダブルディグリー**を目指した3大学間の学生交流協定が合意発足され、平成 25 年度からダブルディグリーを目指した交換留学が本格実施される。
- ・ 当プログラムの基本方針(運営体制、学生に対する責任、経費の配分など)が協定内で明確化され、効果的に機能している。
- ・ 各大学内に国内 PDCA 委員会を、また 3 大学からの代表者で構成する国際 PDCA 委員会を創設し、プログラム運営について、必要な協議を行い、それを実施している。またそのサポートには、九州大学と釜山大学校ではキャンパスアジアオフィスが、上海交通大学では国際交流部のプロジェクトマネージャーが責任者となって行っている。
- ・ 各大学とも、交換留学生(派遣、受入れ学生ともに)へは担当指導教員を定め、その研究室へ配属させることにより、適切な研究教育指導を行っている。
- ・ 学内においては学内 PDCA 委員会の元、当プログラムの責任体制が明確となっており、学内の関連部署(教務課学生係、学務部学務企画課、国際部国際企画課、国際部留学生課留学生支援係など)が適切に業務支援を行い、支援体制が構築され機能している。
- ・ 当プログラムの構想責任者(寺岡靖剛教授)他、十分に国際的な対応能力を有する専任教員3名(田邊特 任教授)、専任教員2名(王准教授・中国籍、朴准教授・韓国籍)が配置されており、プログラムの推進及び 教育業務を適切に遂行している。 教職員の国際的な対応能力の向上の為に実施されている各種支援取り組み(英文 e-mail 通信講座)を適宜受講し、スキルアップに努めている。学生の文化面の対応に関するハンドブックを作成するなど適切にフォローを行っている。

以上の事から、基準2－1に対する当プログラムの取り組み状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

特になし

基準2-2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

1. 基準2-2に係る現況の説明

- ・ 育成する人材像(①専門分野の深い知識の修得とそれに基づく研究開発能力、②エネルギー環境問題の現状の理解と発展的考察力、③グローバルに活動するのに必要な英語力、④グローバル化時代に求められる研究者・技術者倫理、異国の文化・人・社会の理解を備えた人材) 育成の為に、以下の様に共同教育内容を構成し、目的に適合した内容を形成している。
 1. 専門教育カリキュラム
 2. エネルギー環境理工学カリキュラム
 3. 修士論文研究
 4. 英語教育
 5. 文化、語学などに関する教育
- ・ 国際的な共同事業(3大学共同開催のサマースクールやオースタムセミナーなど)を行うことで、教育面での付加価値や学生の国際的経験値向上が明確になっている。
- ・ エネルギー環境理工学に関連する企業見学(LG電子・韓国、三菱重工業・日本)などを実施し、プログラム目的に即した効果的な教育方法がとられている。
- ・ 九州大学においては日本語・日本文化教育、実践英語教育を、釜山大学校では韓国語と英語を、上海交通大学においては中国語と中国文化論の教育を行い、異文化体験、国際経験/交流に資することとしている。
- ・ 本コースの授業は全て英語で行われ、国際化の実をはかっている。
- ・ 3大学とも英語教育を行っているだけでなく、九州大学においてはE-learning system (ALC教育社TOEIC 2000)を導入するなどして、学生の自宅での学習を奨励推進しており、英語教育および留学による英語使用体験が本人の英語力にどのように効果があるかを調べるため、TOEICを受験させるなどして、フォローアップを行っている。

以上のことから基準2-2に対する当プログラムの取り組み状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

ダブルディグリー取得のためには、各大学での必修授業科目の選定等に調整が必要である。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

1. 基準 2－3に係る現況の説明

- ・ 3大学間共に工学系の特徴である、学生を研究室に配属して修士論文研究を行わせる体制をとっており、留学生には行き届いた学習・生活支援が行われている。
- ・ 研究室では他の学生と同様に学べる環境になっているだけでなく、サポーターを配置し、支援体制を整備している。あわせて、履修科目など、学生に対しての適切な履修指導を行っている。
- ・ 自大学から派遣する学生に対して、事前に実践英語教育の実施、派遣先での学習面でのフォローのために TV 会議や現地への出張などで学習支援を実施した。
- ・ 受入れた外国人留学生に対して、履修指導、学生サポーターの配備、指導教員の配置、日本語・英語教育の実施、その他生活面での各種支援を適宜実施した。
- ・ PC 環境の整備や各種の書籍(日本語、英語、専門書籍など)を多数取りそろえ、プログラム生の学習環境を適切に構築している。

以上の事から、基準2－3に対する当プログラムの取り組み状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

- ・ 日中韓の奨学金支払い額(80,000 円、900,000 ウォン、1,700 人民元)が大きく異なる。特に中国での奨学金が少なく、現地の物価に換算すると概ね同じになるとはいえ、不平等感がのこる。韓国では釜山大学から上海交通大学への留学生に対して補完をしていると聞いている。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

1. 基準 2－4 に係る現況の説明

- 各大学共に単位互換/移管に対して学内規則が設定されており、これに従って、留学先での取得単位の移管または互換が、上限(九州大学(KU)最大10単位、上海交通大学(SJTU)14単位、釜山大学校(PNU)12単位)まで、認められることになる。この際15時限の授業を1単位とすることで合意されている。成績評価は下表の通り相互に認定することで合意している。

KU		PNU		SJTU	
評点 Marks	Letter Grading	Marks	Letter Grading	Marks	Letter Grading
90-100	秀	95-100	A ⁺	96-100	A ⁺
		90-94	A ⁰	90-95	A ⁰
80-90	優	85-89	B ⁺	85-89	A ⁺
		80-84	B ⁰	80-84	B ⁺
70-80	良	75-79	C ⁺	75-79	B
		70-74	C ⁰	70-74	B ⁺
60-70	可	65-69	D ⁺	67-69	C ⁺
		60-64	D ⁰	63-66	C
				60-62	C ⁺
60 >	不可	Fail	F ⁰	0-59	D
	不合格	Non Pass	N		
	合格	Pass	P	Pass	P

- ダブルディグリー授与の為には、中間発表・最終論文発表時に自大学及び留学先の教員が同席し審査を行う予定となっており、学位授与に対する適切な体制が構築されている。

以上のことから、基準 2-4 に対する当プログラムの取り組み状況は「進展している」と自己評価する。

2. 今後の課題点

修士論文の判定に関しては、さらに詳細を定める必要がある。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

1. 基準3に係る現況の説明

- 個々の授業での成績評価は各大学共に、すでに確立されたものであり、互いにこれを尊重することで同意している。24年度の交換留学生に対してはすでに成績評価がなされており、派遣大学にその結果が連絡されている。サマースクールには3大学から教員が派遣され、学習成果の評価法についての確認を行った。これにより、サマースクール参加学生の各授業等への共通の評価を行い、3大学共通のサマースクール修了証明書を発行することができた。交換留学生についても同様に、交換留学終了生の成績評価(不可が無いことを確認)した後、3大学の学府長による修了証を発行した。

以下が派遣学生・受入れ学生それぞれの単位取得状況である。

釜山大学校(釜山大学校)での受講科目		上海交通大学(上海交通大学)での受講科目	
講義名	単位	講義名	単位
Boundary Element Method	3	Advances in Environmental Science and Engineering	2
Advanced Turbomachinery	3	Principles of Environmental Chemistry	3
Experimental Methods of Thermo-Fluid Mechanisms	3	Basic principle, Sensors and systems for Mechanical Measurement	3 3
Korean Language		Circulating Fluidized Bed Combustion	3
English		Introduction to Chinese Culture	1
		Chinese Language	1
		English	3

九州大学における取得単位科目一覧

専攻名	Subject(English)	授業科目名(日本語)	単位
エネルギー環境理工学専攻	Research Seminar on Energy and Environmental Science and Engineering	エネルギー・環境学特別演習	2
	Environmental -friendly Fossil Energy Conversion	環境にやさしい化石燃料のエネルギー変換	2
	Introduction to Solar Energy - Fundamentals, Technologies and Applications	太陽エネルギー概論 - 基礎、技術と応用	2
物質理工学専攻	Materials ScienceⅢ (Advanced Topics of Nano-materials Chemistry)	材料科学Ⅲ	2
先端エネルギー理工学専攻	Solid State Physics	固体物性論	2
	Advanced Topics of Energy and Environment	エネルギー環境特論	2
環境エネルギー理工学専攻	Micro-Climatology	地域熱環境工学	2
	Thermal Energy Utilization Systems	熱エネルギー利用システム工学	2
	Mathematical Analysis of Environmental System	環境システム数理解析	2
	Phase Change Heat Transfer	他成分混相電熱学	2
大気海洋環境システム学専攻	Ocean Systems Dynamics I	海洋システム力学 第一	2

- ・ 交換留学終了生には、様々な観点からアンケート調査を行い、満足度やプログラムに関する提言などをまとめ、教育内容改善へと資することとしている。

以上のことから基準3に対する当プログラムの取り組み状況は「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

個々の成績、修士論文の評価など個々の学生への学習効果、個々の大学における学習効果の評価に問題はないが、全体として本プログラムが目指す人材育成の添った学生像が具現化できたかどうかについてその成果をどのように問うかについては、3 大学間で更なる協議が必要である。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

1. 基準 4 に係る現況の説明

- 各大学とも、授業評価、修士論文評価に関しては、すでに十分質保証された現行の方法をとりいれており、3 大学の共通認識となっている。
- 問題や解決・改善事項があれば国際 PDCA 委員会で議論し修正をはかることとしている。
- 九州大学においては、自己評価を行うと共に、九州大学国際交流総合企画会議による評価を実施していただいた。学内機関ではあるが、本プログラムとは直接利害の無い外部評価としてとらえることができる。その評価結果は添付のように、「本プログラムは、学内の関連部署と適切に共有し、大学全体としての質保証においても考慮されている。また 3 大学間で連携してプログラムの改善計画を作成している。」というものであった。

平成 25 年 3 月
九州大学国際交流総合企画会議

大学の世界展開力強化事業（2 年目）進捗状況の評価	
構想責任者	総合理工学研究院・教授 寺岡 靖剛
プログラム名	エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協働教育プログラム
採択年度	平成 23 年度
採択期間	平成 23 年度～平成 27 年度

評価コメント
本プログラムは、時代のニーズにマッチした素晴らしい取り組みであり、平成 23 年 12 月に採択されてから約 1 年の間に、相当入念な準備と計画、活動がなされたと評価できる。これまでの活動、努力の成果は十分あがっており、全般的に計画通り進んでいることから、今後のプログラムの進展を期待できる。 当初の計画にはなかった平成 23 年度実施のスプリングスクール、平成 24 年度実施の CSS/ オータムセミナー、追加により平成 24 年度に実施をされた第 2 回目の実践英語教育などは、学生交流や英語教育の向上において、当初の計画を上回る実施をされており、高く評価できる。 PDCA 委員会の開催や産業界との関係構築を積極的に行っている点も評価できる。今後、研究奨学金を獲得されることを期待する。 また、本プログラムによって育成された人材が、卒業後、社会のどの分野で活躍するかイメージをされており、日本と国際社会の間において、教育の相違を構築しする上で、本プログラムは将来に十分期待できるプログラムである。 本プログラムにおいて学生交流を行うことは、正にグローバル化であり、学問や語学力を磨くことはもとより、視野を広げ、国際的人的ネットワークをつくる意味においても重要なことである。今後はアジア以外の国々との連携もできると理想である。短期留学等の学生の成長を評価する方案を構築されることもよいと思われる。

以上のことから、基準 4 に対する当プログラムの取り組み状況「進展している」と自己評価する。

2. 今後の課題点

平成 25 年度からのダブルディグリープログラムの本格実施により顕在化してくる問題や解決・改善事項があれば、国際 PDCA 委員会で議論し、適宜修正をはかる必要がある。

1. 構想全体における交流学生数(実績)

(単位:人)

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
20	0	66	27

2. 奨学金・宿舍提供の状況

スプリングセミナー	CSS EEST 60名 交換留学生 6	サマースクール21名 交換留学生 6名
-----------	-------------------------	------------------------

(1) 奨学金を受けている学生数

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
0	0	6	6
内訳			
日中韓三国共通の財政支援受給者	0	0	6
大学による奨学金	0	0	0
その他の奨学金	0	0	0

(2) 宿舍(大学所有の宿舍、大学借り上げによる宿舍等)を提供されている学生数

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
20	0	66	6
スプリングセミナー 受入れ20名		CSS EEST 60名 交換留学生 6	

3. 個別の交流プログラムの概況

※色の見方 外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)

日本人学生の派遣(日本⇒中韓)

受入/派遣	相手国	平成23年度				平成24年度			
		第3四半期		第4四半期		第1四半期		第2四半期	
受入	中国				①				③ 3
	韓国				②				④ 3
派遣	中国							② 3	
	韓国						① 21	③ 3	

外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)								日本人学生の派遣(日本⇒中韓)							
No.	交流期間		派遣元	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数		No.	交流期間		派遣先	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数	
	始期	終期				計画値	実績		始期	終期				計画値	実績
1	23年3月	23年4月	上海交通大学	スプリングセミナー(2日間)	0	0	10	1	24年8月	24年8月	釜山大学校	サマースクール(10日間)	3	10	21
2	23年3月	23年4月	釜山大学校	スプリングセミナー(3日間)	0	0	10	2	24年9月	25年1月	釜山大学校	交換留学	最大10	3	3
3	24年10月	25年2月	上海交通大学	交換留学	最大14	3	3	3	24年9月	25年1月	上海交通大学	交換留学	最大10	3	3
4	24年10月	25年2月	釜山大学校	交換留学	最大12	3	3								
5	25年2月	25年2月	上海交通大学	CSS EEST シンポジウム(2日間)	0	10	22								
6	25年2月	25年2月	釜山大学校	CSS EEST シンポジウム(2日間)	0	10	38								

九州大学での開講科目

名称	使用言語	担当教員	受講年次	学期	必修/選択	取得可能単位	単位取得者数
Research Seminar on Energy and Environmental Science and Engineering	英語	田邊哲朗	1	後期	必修	2	6
Environmental -friendly Fossil Energy Conversion	英語	朴 柱日	1	後期	必修	2	6
Introduction to Solar Energy - Fundamentals, Technologies and Applications	英語	王 冬	1	後期	必修	2	6
Materials Science III (Advanced Topics of Nano-materials Chemistry)	英語	水野清義	1	後期	選択	2	
Solid State Physics	英語	徳永和俊	1	後期	選択	2	3
Advanced Topics of Energy and Environment	英語	上滝恵里子	1	後期	選択	2	2
Micro-Climatology	英語	萩島 理	1	後期	選択	2	2
Thermal Energy Utilization Systems	英語	宮崎隆彦	1	後期	選択	2	4
Mathematical Analysis of Environmental System	英語	谷本潤	1	後期	選択	2	2
Phase Change Heat Transfer	英語	小山繁	1	後期	選択	2	1
Ocean Systems Dynamics I	英語	胡 長洪	1	後期	選択	2	1

物質理工学特別演習（研究室実験）	英語	寺岡靖剛	1	後期	必修	2	1
都市建築環境工学演習（研究室実験）	英語	谷本潤	1	後期	必修	2	1
Exercises on Device Materials（研究室実験）	英語	尹聖昊	1	後期	必修	2	1
熱環境システム実験（研究室実験）	英語	伊藤一秀	1	後期	必修	4	1
Exercises in Thermal Energy Conversion systems（研究室実験）	英語	小山繁	1	後期	必修	2	1
化学反応工学演習（研究室実験）	英語	林潤一郎	1	後期	必修	2	1

釜山大学校での受講科目

Boundary Element Method	英語	JC YunHo	1	後期	必修	3	2
Advanced Turbomachinery	英語	Son Changmin	1	後期	必修	3	3
Experimental Methods of Thermo-Fluid Mechamincs	英語	Kim Kyungchun	1	後期	必修	3	3
Korean Language			1	後期	選択		
English			1	後期	選択		

上海交通大学での受講科目

Advances in Environmental Science and Engineering	英語		1	後期	必修	3	2
Principles of Environmental Chemistry	英語		1	後期	必修	3	2
Basic principle, Sensors and systems for Mechanical Measurement	英語		1	後期	必修	3	1
Circulating Fluidized Bed Combustion	英語		1	後期	選択	3	1
Introduction to Chinese Culture	英語		1	後期	選択	2	0
Chinese			1	後期	必修	2	0
English			1	後期	選択	3	0

運営・連携体制

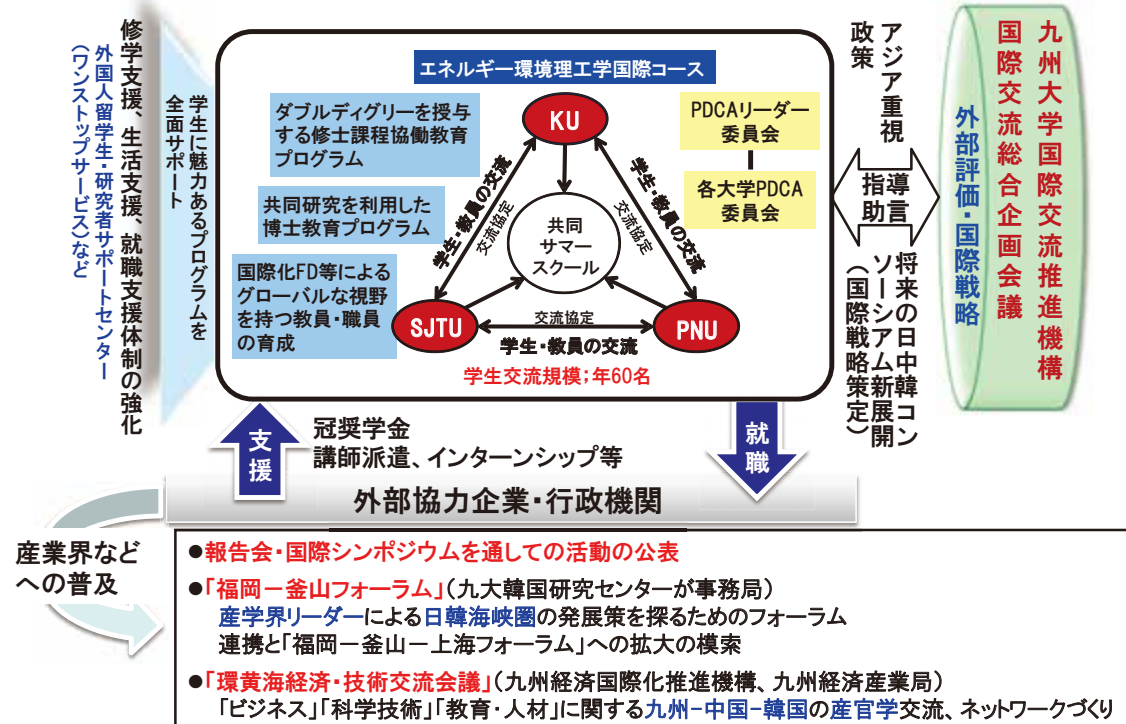


図1. 運営体制

PDCA 委員会

PDCA 委員会とは本大学院協働教育プログラムの企画、実施、評価と改善 (Plan, Do, Check and Action) を担当するコアとなる委員会である。

各大学に設置する PDCA 委員会は、プログラム実施責任者の統括のもとに、下部組織として学務担当部会 (部会長は実施副責任者を兼ねる。構成員は 4 名程度)、学生支援担当部会 (部会長は実施副責任者を兼ねる。構成員は 4 名程度) を設置する。

コンソーシアム内に設置する PDCA リーダー委員会は、各大学の実施責任者 1 名、実副責任者 2 名の合計 9 名で構成する。



図2 PDCA リーダー委員会等の構成図

キャンパスアジアプログラム運営組織メンバー表

エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協働教育プログラム

構想責任者/運営責任者 寺岡 靖剛 総合理工学研究院 教授

キャンパスアジアオフィス

プログラムコーディネーター 田辺 哲朗 特別研究員（総合理工学研究院特任教授）

プログラムオフィサー 市村 菜穂子

〃 三淵 未来

〃 浅川 祐三子

キャンパスアジア 専任教員 田辺哲朗 特別研究員（総合理工学研究院特任教授）

Wang Dong 総合理工学研究院 准教授

Park Joo-Il 総合理工学研究院 准教授

キャンパスアジア 客員教員 Choi Gyung Min 釜山大学校工学府 教授

Lee Tae Ho 釜山大学校工学府 准教授

Wu Yanqing 上海交通大学大学院環境工学専攻 教授

Shangguan Wenfeng 〃 機械工学専攻 教授

学内サポート体制

九州大学総合理工学研究院（運営主体）

キャンパスアジア委員会(国内 PDCA 委員会)

九州大学国際部、国際企画課、外国人留学生・研究者サポートセンター

学務部、学務企画課

筑紫地区事務部、教務課

釜山大学校

エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協働教育プログラム

構想責任者/運営責任者 Choi Gyung Min 工学府環境理工学専攻 教授

プログラムオフィサー Kim Jieun

キャンパスアジア委員会(国内 PDCA 委員会)

上海交通大学

エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協働教育プログラム

構想責任者/運営責任者 Wu Yanqing 大学院環境理工学専攻 教授

プログラムオフィサー Liu Jian 大学院国際交流部

キャンパスアジア委員会(国内 PDCA 委員会)

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	立命館大学	
取組学部・研究科等名	文学部・文学研究科	
構想名称	東アジア次世代人文リーダー養成のための、日中韓共同運営トライアングルキャンパス	
海外の相手大学	【中国】	広東外語外貿大学東方語言文化学院
	【韓国】	東西大学校外国語学部

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	5
	基準 2－2 教育内容・方法	7
	基準 2－3 学習・生活支援	9
	基準 2－4 単位互換・成績評価	12
	基準 3 学習成果	15
	基準 4 内部質保証システム	18

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

「東アジア次世代人文学リーダー」の育成を目標に定め、その実現のために日中韓の学部学生がキャンパスを共に移動し生活する「移動キャンパス」方式を実施しており、目的の設定・共有が優れて進展している。

3大学間では協議組織や支援 IT ツールが構築され、学内の支援・協力体制も機能しており、体制構築についても優れて進展している。教育内容・方法では、プログラム専用の授業を新規に開発し、一貫したカリキュラム内容となっており、進展している。移動キャンパスでの学生サポート体制や、共同シラバスの作成、ラーニングアグリメントの発行、統一した Web 履修管理システムの構築、共同学生宿舎（シェアハウス）の整備など、学習・生活支援について優れて進展している。単位互換については、科目認定の事前調整、補講による授業時間数の調整など単位互換・成績評価の方法の構築が行われており、進展している。

学習成果の測定については、国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなどに関する到達度アンケートを3か国で共同開発して実施しており、取り組みが優れて進展している。

優れた取組み

- ・ 日本・韓国・中国での教育・生活を実際に3か国で同じ期間おこなう「移動キャンパス」により、3か国の学生が一つの集団となり、ともに学び・生活し、互いにサポートしあう取り組みを行っている。
- ・ 運営に関わる諸事項の討議体として「三大学教職員合同会議」を各国持ち回りで実施し、さらに、遠隔システム等の IT ツールを利用した「実務者会議」で日常的な連絡を行っている。
- ・ プログラムマネージャーとしての日本人教員と外国人教員2人を採用し、留学生活におけるリスク管理などにも注意を払っている。また、教育開発支援課の協力による学生到達度アンケートの実施など、学内の各種部署による支援・連携体制が構築されている。
- ・ 本プログラムのために3大学で新たに授業を開発しており、一貫したカリキュラムとなっている。3大学では語学授業と人文系演習授業の割合を統一する調整も行っている。移動キャンパス前には、学生の現地適応力強化に向けた教育を行っている。
- ・ 「学生共同宿舎」（シェアハウス）を借り上げ、日韓中の学生が共同学習・共同生活を行うことで相互理解を深めている。
- ・ 3大学は共同のシラバスを作成し、ラーニングアグリメント「プログラムの手引き」を発行している。
- ・ 他大学で履修した科目を出身大学の語学科目や専門科目として認定できるように事前の調整を行っている。また、出身大学で適切な単位認定ができるように補講の実施も含めた授業時間数等の調整も行っている。
- ・ 日韓中の3か国語に対応した Web 履修管理システムによって、学生がどの国にいても履修登録や、開講大学での成績評価を直接参照できる。
- ・ 国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなど包括的な学生の到達度を定則的にはかるため、到達度アンケートを共同開発し、中国語・韓国語に翻訳して3か国同時に実施している。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

「東アジア次世代人文学リーダー」として目標とする人材像を明快に定めており、それがプログラム全体を背骨として貫いている。日中韓の学部学生がそれぞれのキャンパスを共に移動し生活する「移動キャンパス」は、この人材像に沿った優れた教育実践の枠組みとなっているとともに、東アジアのさまざまな大学で運用できる国際教育プログラムのモデル形成という目的にも即した新たな試みである。移動キャンパス構想について3大学が考え方や方法を共有しており、その実現に協働している。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本キャンパス・アジアプログラムに関して、平成24年6月に3大学で国際交流協定書を交わし、プログラムの目的を「東アジア次世代人文学リーダー養成」と定め、プログラム内容を一致協力して運営することを正式に締結した。

(優れている理由)

3大学間で正式な協定書を締結し、その中でプログラムの目的を明確に定めるとともに、カリキュラム構築等の内容について合意し、共同で運営することを定めていることは、目的の共有や共同運営のために優れている。

大学4年間で修了する学部学生のためのプログラム。東アジアのさまざまな大学で運用できる国際教育プログラムのモデル形成を目指している。

(優れている理由)

目的として、3大学間のみならず、東アジア全般の大学でも運用できるプログラムのモデルを構築することを目指している点は、積極的な取り組みであり優れている。実際に、3か国の学生がシェアハウス等で共同して生活・学習する方式、3か国を国際移動する「移動キャンパス」方式、外国語を学習して原書で人文学の文献を読める力を育成する学習内容がモデルとして開発されている。また、学部課程全般にわたるプログラムであることも望ましい。

語学・専門知識・コミュニケーション能力の3つの能力をバランスよく修得するプログラムである。これまでの国際教育は、語学中心（語学だけ）、研究中心（研究だけ）という偏りがあって当然であったが、東アジア関係の発展と複雑化の中で上記の3つの基本的能力を備えた人材が要請されており、新しい時代の期待に応える人材を育成する。

(優れている理由)

これまでの国際教育の語学や研究中心への偏りを是正しようという目的を設定している点は優れている。実際に、教育方法の面でも、PBL 型、アクション型（フィールドワーク）を増やし、プレゼンテーション能力を高めている。これらの演習を通じて、相手側の文化をきちんと理解し、コミュニケーション（会話）をリードする力を高める努力をしている。また、各大学が有している科目を活用しながらキャンパス・アジア向けに開講しており、3大学で議論を重ねながら歴史や文学の共同開講科目の開発に取り組んでいる。

日本・韓国・中国での教育・生活を実際に3カ国で同じ期間（10週間ずつ）おこなう「移動キャンパス」であり、例えば、日本国内にいて中国や韓国のことを学ぶドメスティックな机上の学問ではなく、現地で、現地の言葉で、現地の文化・歴史・社会を学ぶことができる。3か国の学生が一つの集団となり、3大学のキャンパスをめぐりながら、ともに学び・生活し、互いにサポートしあう。実践的で生きた人文学の知識を持つとともに、国際的な協力関係に直結するような、これまでにない深い信頼関係、友情関係を持つ、「次世代の人文学リーダー」を育成している。

(優れている理由)

「移動キャンパス」の仕組みによって、生活する中で相互理解を深めるという考えは優れている。学生間の人脈形成を促し、将来の人材ネットワーク形成に大きな貢献をする点で、他のプログラムにあまり例のない、優れた取り組みである。キャンパス・アジアが描く学生のモビリティ（大学間交流）の姿を具現化する一つの挑戦的な試みであり、これを実現させた実績は特に優れている。また、学生の語学能力不足の恐れに対して、日本人の教員の講義に中韓のネイティブの教員に通訳として入ってもらうこと、日本人教員を中韓の大学の授業の補佐役として派遣することなどの工夫を行っている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 平成15年以降の経験に基づき今回の計画が構築されており、成功に導く要因の一つとなっている。
- ・ 従来の共同運営事業をさらに発展させる形で、プログラムが作られており、3大学で共通認識があることは、当該プログラムの強みとなっており、成果が大いに期待される。
- ・ 「移動キャンパス」の実施は、多くの課題を克服しながらの実験と言う点で、特に際立った取り組みと言える。3か国の学生の言語能力は、プログラムの実施に当たり、つねに問題となると思われるところから、その対応は語学研修の充実に加えて、さまざまな対策が必要となるであろう。それに対する工夫を引き続き検討されたい。
- ・ こうした人材像を敢えて「人文学リーダー」と捉える視点について、より詳しい説明があれば、人材像はさらに具体的になると思われる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本学では、24年度の文学部新生を主な対象として本プログラムに関する説明会とオリエンテーションをそれぞれ複数回行った。そして同年8月には「移動キャンパス」の事前体験として、日韓中を1週間ずつ移動するオリエンテーションショートステイを実施した。

しかし、ショートステイの最中から深刻化しつつあった日韓中の政治的な問題は、今にいたるまで東アジアにおける緊張を高める状況になっている。このような状況は日本人学生の本プログラムへの参加意欲に影響を与え、説明会、オリエンテーションから11月の学生選抜まで参加希望者が激減する事態もあった。

将来、本事業の長期的かつ安定的な推進策を考えるにあたり、東アジア国際関係や政治状況におけるこのような不安定さに影響されることのない体制作りが課題である。

本プログラムを共同運営する広東外語外貿大学、東西大学と本学は、過去10年以上にわたる共同授業運営の経験をもち、活発な教職員交流を行ってきた。その経験と交流の実績は本プログラムの運営におけるもっとも重要な財産となっている。

本プログラムの運営においては、3カ国の大学制度の相違をどれだけ調整しつつ協力できるのかがポイントとなっており、今後も参加大学の教職員間の協力、信頼関係の強化と維持が求められる。

○コメント

- ・ 国際関係や政治状況は大学がコントロールできるものではなく、そのような外からの変化に強い仕組みを作って頂きたい。これまでの経験の蓄積が、これらの問題の解決を促進することを期待したい。
- ・ 事前研修やショートステイは、学生のモチベーションの向上や語学力の準備などに有効だが、日中韓の政治的環境は、今後も長期にわたる緊張が想定される。従来のような友好的な雰囲気や経済的な結びつきを強調するだけでは、学生の交流へのモチベーションを期待できないことは、十分に予想される。対立を含みつつ、利益共同体としてネゴシエーションを行っていくのは、ある意味で「普通の国家関係」であり、プログラム参加学生への動機づけにも、状況の変化に応じた新たな工夫が必要であろう。これには体制作りだけでなく、理論構築も含まれると思われる。
- ・ 政治等の外部要因に影響されることのないよう、学生への意識付け等が重要であるとの認識はその通りだと思う。
- ・ 魅力ある卓越したプログラムの構築が重要である。長年の3大学間の交流・連携実績及び目標の共通認識に基づき、さらに体制強化を図られたい。
- ・ 日中韓の大学間の調整は、じつに多岐にわたり、その苦労は想像にあまりあるものがある。現場の教職員間の協力と信頼関係の強化と維持は、人脈の重要性から言っても重要であるが、大学や学部/学部の長の定期的な会合も重要となろう。相手大学の長に公的な場でつねに態度表明しておいてもらうのは、効果的と思われる。

基準 2 教育の実施**基準 2-1 実施体制**

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

3大学間での協議組織や日常的な連絡を取り合う実務者組織の体制が構築されていることに加え、メーリングリストや遠隔会議などの業務進捗管理や協議のためのツールが運用されており、情報共有、連絡調整の体制が十分整っている。また、学内での教職協働での役割の組織化などにより、学内の支援・協力体制も機能しているように見受けられる。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

協定書を締結し、運営に関わる諸事項の討議体として「三大学教職員合同会議」を各国持ち回りで実施することになった。また、「三大学教職員合同会議」の円滑な実施のために、遠隔システムを利用した「実務者会議」を設け、議題事項の打ち合わせを行っている。「合同会議」の役割を以下のような事項の協議・調整の場と位置付けた。

- ・ 人材育成目標に関する意見交換、目標共有
- ・ カリキュラム、成績基準、単位認定等に関する調整、協議
- ・ プログラム運営、学生支援等にかかわる情報共有、必要な事項の協議

(優れている理由)

目標の共有など、プログラムの改善を行う体制的な仕組みと、日常の連絡を行う仕組みを分けて明確に位置付けているところは他大学の参考になる優れた取り組みである。特に、学生が移動し合う移動キャンパスの取り組みにおいては、リスク管理などの点からも日常的なコミュニケーションの体制構築が不可欠だと思われる。「三大学教職員合同会議」を各国持ち回りで開催する形で設けたのは、お互いの事情を理解し、解決策を調整する上でも効果的である。また、会議での協議事項を明確にしていることは優れている。

日常的な情報交換を可能にするため、以下のように多様なツールを運用している。

- ①三大学間メーリングリスト：三大学内における業務メーリングリストと三大学共同のメーリングリストを活用して日常的に業務進捗の状況を把握
- ②Web ストレージ「eRoom」：あらゆる書類、情報、データなどを三大学が Web 上で共同運営、管理できるシステムを構築。
- ③遠隔システム：緊急な課題の解決も含め、常に三大学が遠隔システムで会議できる仕組み。

(優れている理由)

日常の情報交換としてのツールの開発は、円滑な運営には欠かせないが、ここで実践されているものは、今後の他大学のモデルとなることが予想されるものである。

学内支援、協力体制としては、留学派遣、受け入れの諸手続きに関しては国際部、そして広報課による学内外への積極的な広報活動が行われている。また、教育開発支援課の協力によって学生到達度アンケートを実施する他、キャリアオフィスの支援による企業訪問、インターンシップなどが企画されている。また、学部内の教学体としては、東洋研究学域、日本史研究学域、心理学域、京都学専攻、言語コミュニケーション専攻などの教員が東アジア文化・日本文化・京都文化・異文化理解などの授業を行い、また学内の様々な学習プログラムの開発に相互に協力している。

(優れている理由)

学内の様々な部署が専門的な事項を担当し、全学的な支援体制、協力体制が構築されていることは優れている。

教員体制としてはプログラムマネージャーとしての日本人教員と外国人教員 2 人（韓国担当、中国担当）を採用し、移動キャンパス中の講義の他、留学生活におけるリスク管理などにも注意を払っている。

(優れている理由)

リスク管理に十分に配慮する体制が構築できている点は優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

日韓中における各政府の支援規模の差が著しいため、三大学でバランスの良い体制を設計するのに困難が生じる場合がある。

○コメント

- ・ 将来的には、自立してプログラムを運営していく必要があると思われるので、政府の支援とは別の、長年の 3 大学間の交流・連携実績に基づいた自主的な努力も期待したい。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

本プログラムのために、カリキュラム中の語学や演習の構成割合を統一し、プログラム専用の授業を新規に開発することにより、一貫したカリキュラム内容となっている。歴史教育においては、各国の高校で使う歴史教科書を使い、多様な歴史認識を知るための工夫を行っている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムでは、通常の交換留学のように現地の大学にある既存の授業を履修するのではなく、本プログラムのために三大学が開発した授業を履修する。学生の語学レベルなどを鑑みながら授業の内容や方法を三大学で調整することで、「移動キャンパス」を通じて一貫したカリキュラムとなった。

(優れている理由)

3大学が協力して新規に科目を開発するのは、本プログラムの教育目標の達成に向けた意欲的な取り組みであり、特に優れている。また、語学レベルへの配慮の点では、キャンパス・アジアに参加するための候補学生を前年度に募集し、半年間の外国語学習を経て最終的な派遣生を決めている。中韓での日本語学習状況把握のためには、現地で使用している日本語教科書を入手し、参考としている。

移動キャンパスのカリキュラムに関しては、3大学が語学授業と人文系演習授業の割合を統一し、各大学での各授業を設置した。

(優れている理由)

参加3大学において、授業内容の調整が図られ、統一した割合での授業設置が行われていることは優れている。

移動キャンパス前の24年度は、立命館大学では人文学的素養を養うために演習授業を行い、相互討論、プレゼンテーションスキル、グローバルな環境における相互理解などを学び、移動キャンパスに向け、学生の現地適応力強化に努めた。

(優れている理由)

派遣学生に対して、語学授業以外にも、移動キャンパス前に知識・スキルの習得を行っており、現地適応力強化のための配慮が十分に行われたことは優れた取り組みであり、他大学の参考になる。

本プログラムの目的「次世代の人文学リーダー育成」にもっとも合致する授業として、各国の歴史を各国の言語で学ぶ授業を設けた。「キャンパス・アジア特殊講義日本史入門」「中外交流史の理解」「韓国史の理解」の3つの授業は、それぞれの大学が運営責任を持つ通年授業として、1年目の「移動キャンパス」を通して履修する。各国の歴史が各国の学校教育でどのように教えられているのか、互いに理解を深め、多様な歴史認識を知ることが目的として、各国の現地での対面授業と遠隔システムを利用して行われている。

(優れている理由)

歴史教育は多様な歴史認識を知る上で、重要な入り口となるところから、これをカリキュラムの重要な一環としたのは優れている。歴史の授業では、各国の高校で使っている歴史の教科書を使って日中韓の歴史を学んでおり、各国の立場をお互いに学ぶ方法として優れている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 本プログラムの教育目標達成に向けて種々の取り組みが見られ、特に優れている。
- ・ 歴史教育を専用授業として設置したのは、お互いの差異を明示する上では、限られた時間内で行うプログラムとしては有効な取り組みであると考え。語学以外にバランスを取るための新たな授業の取り組みも、モデル形成としては重要と思われるところから引き続きその開発を検討されたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

大学入学時期が、日本4月、韓国3月、中国9月と異なるため、とくに語学学習の進捗において各国学生間に差がある。どのように解決するか課題としてある。

○コメント

- ・ 「移動キャンパス」という新たな取り組みだけに、課題の解決に工夫を期待したい。語学の初修者には、とくに差があることは否めない。入学時期の半年のずれは、2年生や3年生でも差を埋めるのは容易ではないと思われる。語学の補習の強化をどこで組むのかがポイントとなるだろう。
- ・ ギャップイヤー的な制度の活用によるプログラム開始の統一や、長期休暇を利用した集中講座等の取り組みなどもあるのではないかな。そのような工夫事例自体を残していただきたい。
- ・ たとえば派遣するホーム大学が配慮するようにしてはどうか。
- ・ すでに実施されている学生の語学レベルを考慮した授業内容や内容の工夫が有効であると考え。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

学習支援では、参加大学間で教員派遣を実施するなど、移動キャンパスで学生をサポートする体制を用意している。共同シラバスの作成、ラーニングアグリメントの発行など本プログラムの教育の共同性を担保するための取り組みが進んでおり、統一した Web 履修管理システムを構築している点も優れている。生活支援では、共同学生宿舎（シェアハウス）として、学生が共に生活する環境が整備され、相互理解と将来の人脈形成にきわめて有意義な取り組みである。また、多様な情報発信や海外交流会との連携は優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

「移動キャンパス」の「日本史入門」授業を行うため、広東外語外貿大学に教員を派遣し、日本人学生のために中国語による授業の学習サポート、生活サポート、さらに中国の社会や文化に関する授業を行った。また、広東外語外貿大学の教職員と協力し、在広州日本国総領事館訪問や 1 泊 2 日のフィールドワークを実施した。各国歴史の授業には、学生が自分が履修していない自国史の授業にボランティアとして参加してサポートし、また予習・復習も学生間で協力して学習している。

（優れている理由）

教員の派遣によるフォローは重要であり、その体制が用意されているのは優れている。また、教育の共同性を担保する上でも優れた取り組みである。学生によるピアサポートは、学生自身の成長につながる良い取り組みである。

キャンパスアジアカフェでの語学カフェとランゲージエクスチェンジを日常的に運営することで、語学力の向上と本学で学ぶ留学生との交流を促している。

（優れている理由）

語学カフェは全学に開放されており、キャンパス・アジアの文学部の学部生（正規のキャンパス・アジア学生）以外にも、大学院生や一般留学生も利用しており、交流を図る機会として優れている。

三大学はカリキュラム、単位認定方法などについて入念に協議して共同のシラバスを作成し、それを学生に熟知させるために、本学文学部内の各専攻・学域で発行している「学びの手引き」を参考に、ラーニングアグリメント「プログラムの手引き」を発行した。学生選抜過程、プログラムスケジュール、カリキュラムの概要、科目一覧、卒業に必要な単位数・要件などが、一目瞭然となっている。共同運営の両大学にも配付し、好評を

得た。また、日韓中の3カ国語に対応したWeb履修管理システムを通じ、学生がどの国にいても履修登録、成績確認ができる。

(優れている理由)

カリキュラムが3大学で共有化され、シラバスが共同で作成されていることは教育の共同性を高めるうえで、優れた取り組みである。実際、科目表には本プログラムの教育課程が明快に示されている。さらに、ラーニングアグリメントとしての「プログラムの手引き」を3大学の学生に配布することで、3か国の学生に適切に情報を示し、学生のプログラムに対する理解を深めさせるとともに、学習の過程等を明確に自覚させている。また、Web履修管理システムを構築し、実際に学生が頻繁に活用していることは、今後の他大学のモデルともなりうる。

「学生共同宿舎」として2棟の建物（シェアハウス）を借り上げた。日韓中の学生が寝室、キッチン、リビングルーム、勉強部屋を共同で使用し、学習のみならず、生活面においても助け合いながら互いを理解してゆく。その宿舎は文化都市京都の中心部に位置しており、韓中の学生たちが現地に密着して社会や文化を理解することになる。3カ国の学生が共同学習・共同生活をする中で相互理解を深めてゆく。

(優れている理由)

3か国の学生が共同生活を行い、教室以外の場所でも交流を図るための環境を整備したことは、各国学生間の相互理解と将来の人脈形成にきわめて有意義な取り組みであり、プログラムの効果を上げる上でも重要な取り組みである。実際に視察した結果、シェアハウスでは、掃除・食事など生活上のルールを話し合いで決めていることや、学生が交代で買い物や夕食の支度を担当するなど学生が互いに助け合いながらの共同生活を送っており、効果的に機能していることがうかがえた。また、地域の活動にも参加しており、教育上有効である。

本学プログラムの活動と運営状況を発信するため、多様なツールを使用している（例：プログラム・ホームページのブログ、立命館大学の海外校友会と交流、学生ニュースレター「CAP」発行の支援）。

(優れている理由)

情報発信のために、さまざまなツールを活用していることは優れた取り組みである。中国における広州校友会との連携は、キャリア形成やプログラム参加学生のネットワーク化にも重要である。学生による自主的な情報発信のための機関誌CAPの発行は、学生の社会訓練としても有効であり、中国では学生が印刷業者と交渉して印刷・発行するなどしており、特に有意義である。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 本プログラム独自の新たな取り組みが随所に行われており、効果を期待したい。

- ・ 相手大学の海外校友会との交流が実現すると、人脈形成の幅がさらに広がり、より効果的と思われるところから、引き続き連携の輪が広がることを期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムは、学生たちがともに学習し、共に生活する方針で運営している。そのため日本滞在時に三カ国の学生の学習環境・生活環境がなるべく同一であることが望ましいと思われる。本プログラムの性格からすれば、韓国や中国の学生への支援だけでなく、日本人学生に対してもそれに準じる支援が必要になっている。

○コメント

- ・ 日本人学生への支援をどう組み込むのか、現在の規則のなかで工夫せざるを得ないのが現状だが、問題点の洗い出しとして、重要なポイントの指摘だと考える。
- ・ 京都で3か国の学生が共同で暮らす仕組みを作っているのであるから、それを活かす方向での検討をお願いしたい。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

互いの大学の単位制度や成績評価方式を尊重したうえで、科目認定の調整を事前に行うとともに、補講による授業時間数の調整を行い、また、Web 履修管理システムを整備して他国での成績が確認できるようにするなどの工夫をしている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

合同教職員会議や遠隔会議を通じて、人材育成目標に沿った移動キャンパス中の提供科目を事前にすり合わせ、他大学で履修した科目を出身大学の語学科目や専門科目として認定できるように調整をおこなった。また、各大学で単位認定基準が異なるため、出身大学で適切な単位認定ができるように補講の実施も含めた授業時間数等の調整もおこなった。それらの結果をラーニングアグリメントとして冊子「プログラムの手引き」に記載することで、受講生は他大学で履修した科目が本学でどのように位置づけられているのかを明確に知ることができ、また自身がどのような学問を修めたかを理解することでモチベーションの向上が図れるようになった。成績通知表や成績証明書にも本学の科目に読み替えて単位認定して記載できるようになっている。

(優れている理由)

参加大学間で、他大学での履修科目を、語学科目だけでなく専門科目としても認定できるよう調整を事前に行ったことは優れている。単位の互換性を高める工夫として「補講の実施も含めた授業時間数等の調整」を行っていることは今後の方向を示唆する工夫と言える。単位認定における各国の考え方の違いの調整は非常に難しいものであるが、それを補講の実施なども含めて真摯に解決しているところは非常に優れた取り組みであると言える。また、手引きにより学生に事前に明示したことも、制度設計として優れた取り組みと言える。

今回プログラム専用に開発した Web 履修管理システムでは、成績評価の参照だけでなく三大学の教職員がそれぞれに ID を持ち、セキュリティが守られた状態で、各国言語によってシラバス入稿・公開や、成績評価入力・公開をおこなうことができる。シラバスにおいては、三大学で協議の上、記載項目を共通とし、成績評価方法などを事前に学生に提示できる形態とした。また成績評価においては、各大学の評価基準に沿って、5 段階の絶対評価/百点満点の点数による相対評価/9 段階の相対評価でおこなうようになっている。Web 環境として構築し、成績評価は出身大学の成績発表時期に拠らず各学期の終了後に迅速に提示することすることで、学生たちがいつどの国に居てもシラバス参照や成績評価確認をおこなえる、円滑で透明性の高い履修管理の仕組みとなっている。

(優れている理由)

互いの大学の成績基準や評価システムを尊重する上で、この方法は良心的な取り組みとなっていると考えられる。成績評価方法を明確化し、事前に学生に提示したことは、学生に対する説明責任を果たす取り組みとして、きわめて有意義と考える。また、科目読替による単位認定では成績が「認定」としか記載されないが、学生は外国の大学での成績評価の結果を Web 履修管理システムで確認することができるようになっており、優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

三大学の学生は、Web 履修管理システムを使って各授業の開講大学から付与された詳細な成績を確認できる。しかし本学学生の成績表には、本学の「他大学等の開講科目の履修」の運用上、単位認定を示す「N (認定)」としか記載していないため、成績評価基準となる GPA に反映できず、学生の学習意欲に影響するという懸念がある。「本学において修得したもののみなす」ことを示す「N (認定)」表記ではなく、本学の通常評価と同じ 5 段階評価を適用することが今後の課題である。

○コメント

- ・ 海外で運用する科目で、5 段階評価を適用するためには、自校の教員を派遣し、相手校の教員との共同授業の形を取ることが考えられる。しかし、それでは相手キャンパスの中に入り、相手校の授業を受けることで異文化体験を十分に行ったことにはならない危険がある。また、形式的に共同授業の形を取るのも、モデル形成としては形骸化を招く恐れも考えられる。「移動キャンパス」を大学国際化の有効なシステムとして本格化するためには、成績担当者の基準を緩和する何らかの「規制緩和」が検討される段階に差し掛かっているように思われる。相手校の成績担当者を、自校の客員教員、兼任教員、非常勤講師に任命するなどの方策も、授業時間の調整の部分を共同授業と認定することも含めてありうるように思われる。
- ・ 評価・評点の互換をどうするか、認定をどうするか、はこれまで担当の先生あるいは学科等に任せてきており、原則やルールが存在していないのかもしれない。この課題は大学としての共通の課題であるので論点と問題点を整理することがまずは大切である。
- ・ プログラムとしての成績評価の基準の統一、互換性の確保は別途進行させておいてもらいたい。
- ・ 現段階では、各国の評価を尊重し相互に認定することになっているようだが、共同して運営するプログラムであるならば、さらに一步進んだ単位互換の仕組みが必要であり、学生にとっても、プログラム参加のメリットがさらに高まるものと思う。
- ・ 教育の質を参加大学間で共同で保証する仕組みを考案することが、本プログラムだけでな

[大学名：立命館大学]

く、日本の大学全体に問われていると考える。今後ジョイント・ディグリーなどで国外大学とのより密接な協力が求められるなかで、現地での授業視察が単位認定の前提のままであれば、こうした協力はきわめて難しい。学習成果を具体的に明示し、その達成を厳密にチェックする方向で、質の共同保証は考えられるのではないか。

基準 3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

語学能力について中国語、韓国語能力の検定試験を定期的に受験し、キャンパス・アジア以外の学生との比較分析を行っている。国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなど、教育プログラムの目指す人材像への到達を包括的に測定するアンケートを3か国で共同して作成・実施し、専門家による分析を行っているなど、学習成果を測定する新たな方法を共同開発していることは特に優れている。内部質保証との関係ともなるが、評価をプログラムの改善に活かす仕組みを整えることが今後、重要であり、期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

語学などの学習能力以外で、国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなど包括的な学生の到達度を定則的にはかるため、本学教育開発支援機構とともに本プログラムのための到達度アンケートを共同開発した。アンケートは中国語・韓国語に翻訳し、ウェブシステム上にアップして、三カ国同時に実施した。本アンケートは、年に1度実施し、4年間を通じての学生の到達度の検証が可能となるように設計した。また、回収したアンケートは専門家を通じて結果分析をして、各国学生の到達度を客観的に検証する。

(優れている理由)

測定の難しいコミュニケーション能力やリーダーシップを具体的に評価する仕組みを到達度アンケートとして構築したのは優れている。アンケート項目は、学生にキャンパス・アジアプログラムを通じて成長してほしい人物像を意図しており、学生と共通理解が醸成されるようになっている。また、3か国で共同開発したことは、3大学間の連携を図る上からも重要であり、毎年アンケートの実施を通じて、プログラムをより効果的なものへと作り上げていくことが期待される。

語学学習の客観的な成果を見るために、日本で広くおこなわれている中国語、韓国語能力の検定試験を定期的に受験している。24年度4月に学習を開始した本学のプログラム参加学生8人が、11月の中国語検定試験（日本中国語検定協会）の4級に全員合格している。

(優れている理由)

検定試験を利用して、明確な形で学生の語学力を検証している。実際、キャンパス・アジアプログラムに参加していない学生と比較して、キャンパス・アジア学生の検定合格率は高く、教職員の予想をはるかに上回って、学生の語学力が上がってきているとのことであり、学習効果が得られている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 学習成果測定・把握のための取組みは他大学の範ともなるものであることから、例えば、到達度アンケートの項目や分析手法等の共有について検討していただきたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

学生の成長を把握するために、学習成果をグラフで表記し、管理する方法も検討している。韓国東西大学ではパイロット学生の選抜段階から学生の成績をグラフに作成して管理してきた。このような方法を三大学共通でシステム化できないか、検討中である。

到達度アンケートについては、24年度夏期のショートステイの前に試行版で実施し、その回答傾向を分析して修正した正規版を25年2月の移動キャンパス開始時に実施した。設問項目、回答方式（選択方式）などは、プログラムの目的や進捗、3カ国の学生の全体的な特徴（気質）を鑑みながら設定する必要があるため、試行版の実施と修正は必要であった。今後も数回実施して、プログラムの進展にともなう回答傾向の推移を見ながら、最終版を決定する予定である。

試行版の実施後に、韓国側からアンケートの内容をさらに学習効果が明確になるものにしてはという提案があった。本学としては、学習効果に関しては授業評価および上記語学試験等を中心に測り、到達度アンケートでは授業学習外の効果・行動や意識の変化を測るためのものとして作成していた。例えば予習や復習の時間、学業その他の生活スケジュール管理意識、集団や社会に対する意識、国際感覚などを測るものと位置付けていることを説明し、韓国側の理解を得た。このような学習に関するアンケートを実施する際に、その趣旨や意義について各国の教育に関する考え方の相違が出る場合があり、それを説明し、各国に理解を得る事前の対応が必要である。

本プログラムは大学4年間をかけたものであるので、現段階での成果は、あくまでも中途の段階のものでしかない。27年度末をもって正式な学習成果としたい。

○コメント

- ・ 学生の到達度アンケートについては、改善を繰り返してより完成度の高いものにする取り組みとして、きわめて有意義と考える。
- ・ 到達度アンケートは、このプログラムの評価システムの重要なポイントとなるものであり、その試行と修正自体が重要な実験とも言えるものとなろう。最終版の決定に至るプロセスそのものが、3大学の連携の試金石とも言え、すでに各国の理解を得る努力がなされており、この試みに期待したい。
- ・ 同一の評価システムであっても、国によって位置づけが異なるという指摘は貴重である。
- ・ 学生の学習成果を多面的に測定する試みとして意欲的な取り組みだと考える。
- ・ 学生を指導する上でも、また学生が学ぶ上でも見える化は有効である。
- ・ 韓国側の提案を受けて、新たなシステムの検討を行うというのは、3大学の連携の成果の一つと言えよう。

- ・ 連携プログラムの成果を検証する意味でも、今後のプログラムの改善のためにも、共同運営大学で共通のシステムを検討することは重要であると思われる。アンケート調査に関しても、3大学で共通の認識のもとでの実施が好ましいと思われる。
- ・ 参加大学間の意思疎通と調整に今後も万全を期していただきたい。
- ・ 4年間をかけて最終的に目指す人材像・アウトカムが得られるかどうかを求めるものであることは承知しているが、中間段階の KPI を明確化し、それをプログラムのモニタリング、改善に活かす仕組みが必要である。

※ KPI : Key Performance Indicator

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

学内運営委員会、学生からの意見聴取などプログラムの質を内部的に保証する手続きは、基本的なものは整っている。予定している外部評価の実施や、学生からの意見を反映する仕組みの構築、毎年のプログラムの進捗の有効性の確認と改善に活かす体制の構築などを更に期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

定期的実施している到達度アンケートの末尾に、学生たちが自由に意見や要望を書けるスペースを用意している。また学生たちが感じたプログラムの問題点を聞き取る機会を設けている。プログラムに対するさまざまな意見や感想、要望等が寄せられ、運営する教職員間で共有し、プログラムの運営に反映させている。

(優れている理由)

アンケートを活用することで学生の声をプログラムに活かす仕組みを取り入れ、PDCA サイクルの一部を機能させようとしている点は優れている。今後、外部評価委員会を設置することも予定しており、質保証についての3大学間の共同が進展しているようにうかがえる。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 学生からの要望等を、授業・プログラムの運営にフィードバックする具体的な仕組みがさらに整備されれば、きわめて有意義なものになると考える。

「キャンパス・アジア」モニタリング 自己分析書

平成25年5月

「東アジア次世代人文学リーダー養成のための、
日中韓共同運営トライアングルキャンパス」

立命館大学

<目次>

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況	
1. 基本情報	1
2. 構想の目的、概要、進捗状況	1
II 基準ごとの自己分析	
基準1 教育プログラムの目的	4
基準2 教育の実施	
基準2-1 実施体制	6
基準2-2 教育内容・方法	8
基準2-3 学習・生活支援	10
基準2-4 単位互換・成績評価	12
基準3 学習成果	14
基準4 内部質保証システム	16

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況

1. 基本情報

1. 大学名	立命館大学	
2. 構想名称	【和文】	東アジア次世代人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営トライアングルキャンパス
	【英文】	Plan for a Joint Campus representing Korea, China and Japan which will foster leaders in East Asian humanities for the next generation.
3. 取組学部・研究科等名	文学部・文学研究科	
4. 海外の相手大学	【中国】	広東外語外貿大学
	【韓国】	東西大学校

2. 構想の目的、概要、進捗状況

○構想の目的及び概要

1. 構想の目的

本構想は、日中韓の選抜された学生（以下パイロット学生という）がそれぞれのキャンパスを国際移動し、共同運営される講義群や各大学の講義群を履修することで、日中韓の各言語・文化・文学・歴史等を深く理解し、とりわけ文化・教育研究分野で活躍する優秀な人材を育成する拠点の形成を目的としている。アジアに対する伝統的日本文化の発信地である京都と、東アジアの一大ハブ港である釜山、広州とのネットワークにより、日中韓の伝統文化・最新文化の両者に通じた高いコミュニケーション能力を有した人材の育成が目指され、卒業後も含めた日中韓次世代リーダーのネットワーク・人材バンクを構築する。

2. 構想の背景

平成 15 年以降、立命館大学・東西大学校（韓国釜山市）・広東外語外貿大学（中国広州市、平成 18 年から参加）の三大学間で高度な遠隔システム（テレビ会議）による講義（以下日中韓連携ゼミという）を実施し、正課科目として各大学が単位を認定してきた。また夏季と春季には、7～10 日間程度の集中授業をローテーションで各国において実施し、講義・フィールドワーク等を実施してきた。これらを通じて、東西大、広東外語外貿大の外国語学部の学部生・院生と立命館大文学部・文学研究科の学部生・院生が、現代日中韓の各文化・経済・社会の諸問題や教科書問題・領土問題等の共同テーマに基づいて調査・研究を行い、それを相互に発表し、議論を行ってきた。この 8 年間で、日中韓で

のべ703名がこのプログラムに参加し、修了者は留学先の国などで大学教員、中高教諭、翻訳通訳業などで活躍している。また日本のNHKをはじめ、日中韓三カ国のマスコミでも取り上げられ、内外で高い注目を受けてきた。その成果として、相互の留学率も高まり、また職員の相互研修も実施し、立命館大学と広東外語外貿大の間では修士課程の複数学位制度が設けられるなど、三大学間では共同運営キャンパスのための基盤が構築されてきた。

3. 構想の概要

以上の実績を基礎とし、以下の事業をおこなうことでキャンパス・アジアとしての発展・拠点形成を図る。

- (1) 上記の日中韓連携ゼミに加え、さらに中国語・韓国語による東アジア言語・文化・文学・歴史等に関わる各大学の学生が受講可能な共同講義群を開講し、日中韓複数言語に堪能な人材を育成する。
- (2) 選抜されたパイロット学生（各国約10名）を中心に、日中韓連携ゼミ・ショートステイに加え、総計2年間の移動キャンパスをプログラム化し、日中韓の言語・文化・文学・歴史等を修得できるそれぞれの自国語を基本とするカリキュラムを整備し、単位互換によって単位認定する。
- (3) 日本側は、パイロット学生用移動キャンパスプログラムも含めて、文学部東洋研究学域現代東アジア言語・文化専攻のカリキュラムに位置づけ（中国側では東方語言文化学院、韓国側では東西大学外国語学部の正課科目として位置づけ）、移動キャンパス以外は原則として文学部全学生に履修を推奨する。
- (4) パイロット学生を中心に、希望する各大学所属学生も含めて、現在有する文学部の豊富な国内インターンシップや、韓国・中国でのインターンシップに学生を相互参画させ、キャリア形成に力を入れる。また、既に実施されている広東外語外貿大学および今後新設される東西大学校との修士課程の複数学位制度を利用して、アジアで広く通用する大学院レベルの高等教育キャリアの形成も促進する。
- (5) 学士力の検証、教育の質の保証のために、これまでも実施してきた三大学教職員合同会議を強化・定例化し、成績管理等の協働性を高めるとともに、語学力などの客観的数値に基づく検証も実施し、卒業時には本プログラム修了証を共同で発行する。また、日本側では到達度検証として卒業論文を必修とする。
- (6) 卒業後も日中韓の本プログラム修了者のネットワークを強固に組織化し、それらを日中韓の資産として活用することを図る。また、「日中韓リーダーズフォーラム」を開催し、本プログラムの修了者・履修者や学内外の本事業関係者などが集まり、各国語の研究発表などを公開で行って、成果の公表に努める。

○平成24年度末までの取組状況

基準1

- 3大学の共通目的「東アジア次世代人文学リーダー養成」策定
- 学部学生のための国際教育プログラムを目指す
- バランスの取れたカリキュラムを構築
- 従来の3大学共同運営授業の実績・成果を基盤とする目標と内容を設定
- 3カ国で3カ国の学生がともに学び・生活する「移動キャンパス」

基準2-1

- 「三大学教職員合同会議」と「実務者会議」、「運営委員会」の開催
- 「教員体制」と「学内支援体制」を構築

基準2-2

- カリキュラム構成統一とキャンパス・アジア専用授業を設置
- 通年科目の歴史授業を開講
- 「移動キャンパス」中の教員派遣と学生間サポート学習
- 特別企画および研修の実施

基準2-3

- 「パイロット学生共同宿舎」と語学カフェ、ランゲージエクスチェンジの実施
- ラーニングアグリメント発行およびWeb履修管理システムの構築
- ノートパソコンの貸与
- 多様な情報発信および学外との連携

基準2-4

- 他大学で受講した全ての科目の単位認定と、ラーニングアグリメント配布
- 開講大学での評価の尊重と、Web履修管理システムの運用

基準3

- プログラム全体の到達度アンケートを開発・三カ国で実施
- 語学能力の定期的検証
- OB/OG組織の土台作りを実施
- 三大学による教育方法の協議・開発

基準4

- 学内運営委員会の設置
- 到達度アンケートの自由記述欄の検証と定期的なプログラムへの意見収集
- 内部評価会議と外部評価委員会の設置準備

Ⅱ 基準ごとの自己分析

基準1 教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

1. 基準1に係る現況の説明

○ 3大学の共通目的「東アジア次世代人文学リーダー養成」策定

本キャンパス・アジアプログラムに関して、平成24年6月に3大学で国際交流協定書を交わし、プログラムの目的を「東アジア次世代人文学リーダー養成」と定め、以下に記すようなプログラム内容を一致協力して運営することを正式に締結した。

○ 学部学生のための国際教育プログラムを目指す

大学院プログラムのような研究者を育成するものではなく、大学4年間で修了する学部学生のためのプログラム。東アジアのさまざまな大学で運用できる国際教育プログラムのモデル形成を目指している。

○ バランスの取れたカリキュラムを構築

語学・専門知識・コミュニケーション能力の3つの能力をバランスよく修得するプログラム。これまでの国際教育は、語学中心（語学だけ）、研究中心（研究だけ）という偏りがあったが、東アジア関係の発展と複雑化の中で上記の3つの基本的能力を備えた人材が要請されており、新しい時代の期待に応える人材を育成する。

○ 従来の3大学共同運営授業の実績・成果を基盤とする目標と内容を設定

我々3大学は平成15年以降、インターネット回線を用いた遠隔講義「日韓中連携講座」を実施し、これが本プログラムの原型となった。その履修者はこれまでに約800人に上り、各国の大学院へ留学、自国以外での大学・高校・中学へ就職（教職員）、翻訳通訳やマスコミ、または国際関連の業種などで活躍するものが少なくない。このような実績を踏まえ、上記のような共通の目的を共有し、3大学の教学連携を強化し、東アジアの人文学や国際社会で活躍できる能力を持った、より高度な人材育成プログラムになるよう互いに協力している。

○ 3カ国で3カ国の学生がともに学び・生活する「移動キャンパス」

日本・韓国・中国での教育・生活を実際に3カ国で同じ期間（10週間ずつ）おこなう「移動キャンパス」。例えば、日本国内にいて中国や韓国のことを学ぶドメスティックな机上の学問ではなく、現地で、現地の言葉で、現地の文化・歴史・社会を学ぶ。3カ国の学生が一つの集団となり、3大学のキャンパスをめぐりながら、ともに学び・生活し、互いにサポートしあう。実践的で生きた人文学の知識を持つとともに、国際的な協力関係に直結するような、これまでにない深い信頼関係、友情関係を持つ、「次世代の人文学リーダー」を育成する。

上記項目等の分析から、自己評価を「進展している」としたい。

2. 今後の課題点

○ 安定的な体制作り

本学では、24 年度の文学部新入生を主な対象として本プログラムに関する説明会とオリエンテーションをそれぞれ複数回行った。そして同年 8 月には「移動キャンパス」の事前体験として、日韓中を 1 週間ずつ移動するオリエンテーションショートステイを実施した。

しかし、ショートステイの最中から深刻化しつつあった日韓中の政治的な問題は、今にいたるまで東アジアにおける緊張を高める状況になっている。このような状況は日本人学生の本プログラムへの参加意欲に影響を与え、説明会、オリエンテーションから 11 月の学生選抜まで参加希望者が激減する事態もあった。

将来、本事業の長期的かつ安定的な推進策を考えるにあたり、東アジア国際関係や政治状況におけるこのような不安定さに影響されることのない体制作りが課題である。

○教職員間の協力、信頼関係の重要性

本プログラムを共同運営する広東外語外貿大学、東西大学と本学は、過去 10 年以上にわたる共同授業運営の経験をもち、活発な教職員交流を行ってきた。その経験と交流の実績は本プログラムの運営におけるもっとも重要な財産となっている。

本プログラムの運営においては、3 ヶ国の大学制度の相違をどれだけ調整しつつ協力できるのかがポイントとなっており、今後も参加大学の教職員間の協力、信頼関係の強化と維持が求められる。

基準2 教育の実施
基準2-1 実施体制 目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

1. 基準2-1に係る現況の説明

○ 「三大学教職員合同会議」と「実務者会議」、「運営委員会」の開催

本事業の正式的な出発を学内外に示すキックオフカンファレンスを24年5月に行ない、その際に三大学が共同運営する方針を示す協定書を締結し、運営に関わる諸事項の討議体として「三大学教職員合同会議」を各国持ち回りで実施することになった。また、「三大学教職員合同会議」の円滑な実施のために、遠隔システムを利用した「実務者会議」を設け、議題事項の打ち合わせを行なっている。

「合同会議」の役割を以下のような事項の協議・調整の場と位置付けた。

- ・人材育成目標に関する意見交換、目標共有
- ・カリキュラム、成績基準、単位認定等に関する調整、協議
- ・プログラム運営、学生支援等にかかわる情報共有、必要な事項の協議

さらに、各種の会議以外でも、日常的な情報交換を可能にするため、次のようなツールを運用している。

①三大学間メーリングリスト：

三大学内における業務メーリングリストと三大学共同のメーリングリストを活用して日常的に業務進捗の状況を把握

②Web ストレージ「eRoom」：

あらゆる書類、情報、データなどを三大学が Web 上で共同運営、管理できるシステムを構築。

③遠隔システム：

緊急な課題の解決も含め、常に三大学が遠隔システムで会議できる仕組み。

上記の体制以外に、立命館大学文学部においては本事業に関わる最高決定機関として「キャンパスアジア運営委員会」を設置した。「運営委員会」は運営母体である東洋研究学域の専任教員を構成員とし、本事業の運営と学内の全般的な支援に関わる事項についての検討、承認をおこなっている。

○ 「教員体制」と「学内支援体制」を構築

教員体制としてはプログラスマネージャーとしての日本人教員と外国人教員 2 人(韓国担当、中国担当)を採用し、移動キャンパス中の講義の他、留学生活におけるリスク管理などにも注意を払っている。

学内支援、協力体制としては、留学派遣、受け入れの諸手続きに関しては国際部、そして広報課による学内外への積極的な広報活動が行われている。また、教育開発支援課の協力によって学生到達度アンケートを実施する他、キャリアオフィスの支援による企業訪問、インターンシップなどが企画されている。また、学部内の教学体としては、東洋研究学域、日本史研究学域、心理学域、京都学専攻、言語コミュニケーション専攻などの教員が東アジア文化・日本文化・京都文化・異文化理解などの授業を行い、また学内の様々な学習プログラムの開発に相互に協力している。

上記項目等の分析から、自己評価を「進展している」としたい。

2. 今後の課題点

日韓中における各政府の支援規模の差が著しいため、三大学でバランスの良い体制を設計するのに困難が生じる場合がある。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

1. 基準 2－2に係る現況の説明

○ 「移動キャンパス」カリキュラム構成統一とプログラム専用授業を設置

3か国の学生が一緒に3つのキャンパスをめぐる「移動キャンパス」のカリキュラムに関しては、3 大学が語学授業と人文系演習授業の割合を統一し、各大学での各授業を設置した。「移動キャンパス」前の 24 年度は、本学では朝鮮語と中国語の語学授業以外に、人文的素養を養うために演習授業を行い、相互討論、プレゼンテーションスキル、グローバルな環境における相互理解などを学び、移動キャンパスに向け、学生の現地適応力強化に努めた。

また、本プログラムでは、通常の交換留学のように現地の大学にある既存の授業を履修するのではなく、本プログラムのために三大学が開発した授業を履修する。学生の語学レベルなどを鑑みながら授業の内容や方法を三大学で調整することで、「移動キャンパス」を通じて一貫したカリキュラムとなった。

○ 通年科目の歴史授業を開講

本プログラムの目的「次世代の人文リーダー育成」にもっとも合致する授業として、各国の歴史を各国の言語で学ぶ授業を設けた。「キャンパス・アジア特殊講義日本史入門」「中外交流史の理解」「韓国史の理解」の3つの授業は、それぞれの大学が運営責任を持つ通年授業として、1 年目の「移動キャンパス」を通して履修する。各国の歴史が各国の学校教育でどのように教えられているのか、互いに理解を深め、多様な歴史認識を知ることが目的として、各国の現地での対面授業と遠隔システムを利用して行われている。

○ 「移動キャンパス」中の教員派遣と学生間サポート学習

「移動キャンパス」の上記「日本史入門」授業を行うため広東外語外貿大学に教員を派遣し、また日本人学生のために中国語による授業の学習サポート、生活サポート、さらに中国の社会や文化に関する授業を行った。また広東外語外貿大学の教職員と協力し、在広州日本国総領事館訪問や1泊2日のフィールドワークを実施した。

各国歴史の授業には、学生が自分が履修していない自国史の授業にボランティアとして参加してサポートし、また予習・復習も学生間で協力して学習している。

○ 特別企画および研修の実施

本プログラムの目的を達成するために、教室での授業以外に、一般市民に公開する特別講座や学内の緊密な協力体制による研修などを実施している。

- ・ 姜萬吉氏特別講演会「東アジア史の未来のために」
- ・ 立命館大学平和ミュージアム研修
- ・ 夏期オリエンテーションショートステイ
- ・ 冬季語学現地実習
- ・ 夏期補習授業、中国語発音講座
- ・ 在広州日本国総領事館訪問

このような特別企画は、パイロット学生のニーズに積極的に応じる企画であると同時に、東アジア的観点の涵養、現地適応力の向上、東アジアで求められている人材像の発見などの趣旨から進められており、学生たち

の自立的な活動力向上につながっている。

上記項目等の分析から、自己評価を「進展している」としたい。

2. 今後の課題点

大学入学時期が、日本4月、韓国3月、中国9月と異なるため、とくに語学学習の進捗において各国学生間に差がある。どのように解決するか課題としてある。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

1. 基準 2－3に係る現況の説明

○ 「3カ国学生共同宿舎」と語学カフェ、ランゲージエクスチェンジの実施

「学生共同宿舎」として2棟の建物を借り上げた。日韓中の学生が寝室、キッチン、リビングルーム、勉強部屋を共同で使用し、学習のみならず、生活面においても助け合いながら互いを理解してゆく。その宿舎は文化都市京都の中心部に位置しており、韓中の学生たちが現地に密着して社会や文化を理解することになる。3カ国の学生が共同学習・共同生活をする中で相互理解を深めてゆく。

また、キャンパスアジアカフェでの語学カフェとランゲージエクスチェンジを日常的に運営することで、語学力の向上と本学で学ぶ留学生との交流を促している。

○ ラーニングアグリメント発行およびWeb履修管理システムの構築

三大学はカリキュラム、単位認定方法などについて入念に協議して共同のシラバスを作成し、それを学生に熟知させるために、本学文学部内の各専攻・学域で発行している「学びの手引き」を参考に、ラーニングアグリメント「プログラムの手引き」を発行した。学生選抜過程、プログラムスケジュール、カリキュラムの概要、科目一覧、卒業に必要な単位数・要件などが、一目瞭然となっている。共同運営の両大学にも配付し、好評を得た。

また、日韓中の3カ国語に対応したWeb履修管理システムを通じ、学生がどの国にいても履修登録、成績確認ができる。

○ ノートパソコンの貸与

学生への学習支援としてノートパソコンを貸与した。パイロット学生は日韓中でどのようなIT環境にあっても、一台の自分用のパソコンで学習、生活することができ、緊急を含む諸連絡を即時に確認できるようになっている。また「キャンパス・アジアポータルサイト」を通して、各自の履修登録、成績の確認もできる。

○ 多様な情報発信および学外との連携

本学プログラムの活動と運営状況を発信するため、以下のようなツールを使用している。

① プログラム・ホームページのブログ

事務局からのイベント告知・報告、各種連絡、案内事項だけでなく、教員と学生による記事も発信。

② Face book ページ

ブログは発信側の一方的な情報伝達手段で、パソコンを開ける環境になれば情報を受信できない。それをカバーし、より日常的な情報の送受信を行うためFace book ページを開設。OB 会の発足など、多様な人材のつながりや協力を生み出すことを想定した活用で、将来東アジア人材バンク構築に向けた活動になることを期待している。

③ 立命館大学の海外校友会と交流

中国の広東外語外貿大学での「移動キャンパス」1 学期に、立命館広州校友会の校友と交流。また同市

で日本語学校を経営する校友による、中国での仕事や生活、学生時代のキャリア形成についての講演を実施した。

④ 学生ニュースレター「CAP」発行の支援

学生のプログラムに関する自主的な情報発信のため、機関誌として発行し、その支援を行っている。移動キャンパス中の活動や様子を現地と自国の学内外に同時に発信できる企画として、現在第 2 号まで発行。中国では学生たちが一般の印刷業者と交渉して、印刷・発行した。

上記項目等の分析から、自己評価を「進展している」としたい。

2. 今後の課題点

本プログラムは、学生たちがともに学習し、共に生活する方針で運営している。そのため日本滞在時に三カ国の学生の学習環境・生活環境がなるべく同一であることが望ましいと思われる。本プログラムの性格からすれば、韓国や中国の学生への支援だけでなく、日本人学生に対してもそれに準じる支援が必要になっている。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

1. 基準 2－4に係る現況の説明

○ 他大学で受講した全ての科目の単位認定と、ラーニングアグリメント配布

通常、本学では、海外の大学で単位取得した科目は、単位認定科目として、一律に成績処理され、単位認定をしている科目としてのみ成績通知表や証明書に記載する取り扱いをおこなう。今回、単位の取得にかかわっては、合同教職員会議や遠隔会議を通じて、人材育成目標に沿った移動キャンパス中の提供科目を事前にすり合わせ、他大学で履修した科目を出身大学の語学科目や専門科目として認定できるように調整をおこなった。また、各大学で単位認定基準が異なるため、出身大学で適切な単位認定ができるように補講の実施も含めた授業時間数等の調整もおこなった。それらの結果をラーニングアグリメントとして冊子「プログラムの手引き」に記載することで、受講生は他大学で履修した科目が本学でどのように位置づけられているのかを明確に知ることができ、また自身がどのような学問を修めたかを理解することでモチベーションの向上が図れるようになった。成績通知表や成績証明書にも本学の科目に読み替えて単位認定して記載できるようになっている。

○ 開講大学での評価の尊重と、Web 履修管理システムの運用

成績評価は、合同教職員会議において「各大学の基準を尊重し、各授業の開講大学の基準で成績評価をおこなう」ことを決定した。前述のとおり、中韓で履修した科目は本学では「認定(N評価)」となり、学習目標に対する到達レベルでの評価はおこなわれない。しかし、今回のプログラム専用に開発した Web 履修管理システムによって、受講生たちは開講大学での評価を直接参照できるので、自らの履修に対する評価を知ることができ、学習のモチベーション向上につながっている。この Web 履修管理システムでは、成績評価の参照だけでなく三大学の教職員がそれぞれに ID を持ち、セキュリティが守られた状態で、各国言語によってシラバス入稿・公開や、成績評価入力・公開をおこなうことができる。シラバスにおいては、三大学で協議の上、記載項目を共通とし、成績評価方法などを事前に学生に提示できる形態とした。また成績評価においては、各大学の評価基準に沿って、5 段階の絶対評価/百点満点の点数による相対評価/9 段階の相対評価でおこなうようになっている。Web 環境として構築し、成績評価は出身大学の成績発表時期に抛らず各学期の終了後に迅速に提示することすることで、学生たちがいつどの国に居てもシラバス参照や成績評価確認をおこなえる、円滑で透明性の高い履修管理の仕組みとなっている。

上記項目等の分析から、自己評価を「進展している」としたい。

2. 今後の課題点

Web 履修管理システムでは各大学の学生がそれぞれ詳細な成績を確認できるが、成績評価としては単位認定を示す「N(認定)」としか記載されない。これは本学で設定する学生個々の成績評価基準となる GPA に反映できないため、学生の学習意欲を高める上で影響があるのではないかと考えている。「履修した」ことを示す「N(認定)」との単純な記録だけではなく、本学での通常評価となる 5 段階評価を適用できるように検討をすることが課題となる。現時点では大学設置基準上、海外で運用する科目で、本学の使用する 5 段階評価をおこなうためには、現地の授業を作成・監督する本学の教員を成績担当者として置く必要があるが、各開講大学の主体的な運営を尊重することと相反する場合もあり、継続的な検討課題となっている。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

1. 基準3に係る現況の説明

本プログラムは、学部4年間を通じて一つのプログラムとなっている点に特徴がある。このような長期プログラムとしての特徴を考慮し、以下のような学習成果の検証方法を実施・検討している。

○ プログラム全体の到達度アンケートを開発・三カ国で実施

語学などの学習能力以外で、国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなど包括的な学生の到達度を定期的にはかるため、本学教育開発支援機構とともに本プログラムのための到達度アンケートを共同開発した。アンケートは中国語・韓国語に翻訳し、ウェブシステム上にアップして、三カ国同時に実施した。本アンケートは、年に1度実施し、4年間を通じての学生の到達度の検証が可能となるように設計した。また、回収したアンケートは専門家を通じて結果分析をして、各国学生の到達度を客観的に検証する。

○ 語学能力の定期的検証

語学学習の客観的な成果を見るために、日本で広くおこなわれている中国語、韓国語能力の検定試験を定期的に受験している。24年度4月に学習を開始した本学のプログラム参加学生8人が、11月の中国語検定試験(日本中国語検定協会)の4級に全員合格している。

○ OB/OG 組織の土台作りを実施

Face book やホームページなど、多様な手段を通じて三大学のパイロット生 28 名のネットワークを卒業後も継続して活かしていく組織作りを企画している。その土台として、これまでの三大学 10 年の交流の中で形成した OB 会を本年度に立ち上げる予定である。

○ 三大学による教育方法の協議・開発

本プログラムでは、遠隔講義の実施をはじめ、教職員の講義見学を相互に行い授業方式や成績評価方法などについて、活発な意見交換を行っている。こうした三大学間の情報交換と議論を通じて実施中の教育方法を検証し、さまざまな講義方法を模索している。

上記項目等の分析から、自己評価を「進展している」としたい。

2. 今後の課題点

学生の成長を把握するために、学習成果をグラフで表記し、管理する方法も検討している。韓国東西大学ではパイロット学生の選抜段階から学生の成績をグラフに作成して管理してきた。このような方法を三大学共通でシステム化できないか、検討中である。

到達度アンケートについては、24年度夏期のショートステイの前に試行版で実施し、その回答傾向を分析して修正した正規版を 25 年2月の移動キャンパス開始時に実施した。設問項目、回答方式(選択方式)などは、プログラムの目的や進捗、3カ国の学生の全体的な特徴(気質)を鑑みながら設定する必要があるため、試行版の実施と修正は必要であった。今後も数回実施して、プログラムの進展にともなう回答傾向の推移を見ながら、最終版を決定する予定である。

試行版の実施後に、韓国側からアンケートの内容をさらに学習効果が明確になるものにしてはという提案があった。本学としては、学習効果に関しては授業評価および上記語学試験等を中心に測り、到達度アンケートでは授業学習外の効果・行動や意識の変化を測るためのものとして作成していた。例えば予習や復習の時間、学業その他の生活スケジュール管理意識、集団や社会に対する意識、国際感覚などを測るものと位置付けていることを説明し、韓国側の理解を得た。このような学習に関するアンケートを実施する際に、その趣旨や意義について各国の教育に関する考え方の相違が出る場合があり、それを説明し、各国に理解を得る事前の対応が必要である。

本プログラムは大学4年間をかけたものであるので、現段階での成果は、あくまでも中途の段階のものでしかない。27年度末をもって正式な学習成果としたい。

基準4 内部質保証システム
内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

1. 基準4に係る現況の説明

○ 学内運営委員会の設置

プログラムの実施内容について報告、評価、検証をするために、プログラムに関連する学部内教学体から委員を選出する形で運営委員会を設置し、定期的に開催することで意見やアドバイス等を得ている。

○ 到達度アンケートの自由記述欄の検証と定期的なプログラムへの意見収集

定期的実施している到達度アンケートの末尾に、学生たちが自由に意見や要望を書けるスペースを用意している。また学生たちが感じたプログラムの問題点を聞き取る機会を設けている。プログラムに対するさまざまな意見や感想、要望等が寄せられ、運営する教職員間で共有し、プログラムの運営に反映させている。

○ 内部評価会議と外部評価委員会の設置準備

24年2月に、「移動キャンパス」が始まる前に、約一年間のプログラム運営について振り返る会議をおこなった。プログラム運営に関与した教職員を主なメンバーとして、プログラム内の各種行事・授業についてあらためて思い返し、学生から収集していた意見や不満などを参考にして、意見や感想を述べあった。最終的に、将来への常設化に向けた提言をまとめ、総括をおこなった。

またプログラムの外部からの評価をする委員会を設置する予定である。中国や朝鮮半島に関する学識者や関西の経済界から委員を招く準備を進めており、すでに人選は終了している。

上記項目等の分析から、自己評価を「標準」としたい。

2. 今後の課題点

〔大学名〕	立命館大学
	(中国側大学) 広東外語外貿大学 (韓国側大学) 東西大学校
〔構想名〕	東アジア次世代人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営トライアングルキャンパス

1. 構想全体における交流学生数(実績)

(単位:人)

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
0	16	74	70

2. 奨学金・宿舍提供の状況

(単位:人)

(1) 奨学金を受けている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
内訳	日中韓三国共通の財政支援受給者	0	0	39	28
	大学による奨学金	0	0	0	3
	その他の奨学金	0	16	39	16

(2) 宿舍(大学所有の宿舍、大学借り上げによる宿舍等)を提供されている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
		0	16	74	70

3. 個別の交流プログラムの概況

※色の見方 外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)

日本人学生の派遣(日本⇒中韓)

受入/派遣	相手国	平成23年度				平成24年度			
		第3四半期		第4四半期		第1四半期		第2四半期	
受入	中国							①19	③20
	韓国							②20	④15
派遣	中国			①6				②17	⑤4
	韓国							③1	⑥4
						④4			
						⑦8			
						⑧16			

外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)							日本人学生の派遣(日本⇒中韓)								
No.	交流期間		派遣元	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数		No.	交流期間		派遣先	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数	
	始期	終期				計画値	実績		始期	終期				計画値	実績
①	24.07	24.08	中国	日韓中連携講座(4日間)	—	20	19	①	24.02	24.02	中国	日韓中連携講座(6日間)	2	20	16
②	24.07	24.08	韓国	日韓中連携講座(4日間)	—	20	20	②	24.08	24.08	中国	オリエンテーション・ショートステイ(1週間)	2	20	17
③	24.08	24.08	中国	オリエンテーション・ショートステイ(1週間)	—	20	20	③	24.08	24.08	韓国	オリエンテーション・ショートステイ(1週間)	2	20	17
④	24.08	24.08	韓国	オリエンテーション・ショートステイ(1週間)	—	20	15	④	24.08	24.12	韓国	CAサポート学生派遣	18	4~5	4
								⑤	24.12	24.12	中国	語学集中研修(6日間)	0	5	4
								⑥	24.12	24.12	韓国	語学集中研修(5日間)	0	5	4
								⑦	25.02	25.04	中国	2013年 移動キャンパス1学期	10	10	8
								⑧	25.02	25.02	韓国	日韓中連携講座(4日間)	2	20	16

【教育研究上の目的】

- ① 中国・韓国・日本・文化・社会・歴史に関する基礎知識を身に付け、それを東アジア全体の中で位置づけることができる。
- ② 東アジアに関する人文学的専門知識を有し、さらにそれを高度化させていくことができる。
- ③ 中国語・朝鮮語の実践的な運用能力を身に付け、各国で生活・学習する上で十分にコミュニケーションすることができる。
- ④ 東アジアの理解に不可欠な中国語・朝鮮語の文獻・データを理解・分析し、かつ各言語で発表することができる。
- ⑤ 東アジアの文化・歴史の通いを理解しつづき、東アジアの現代的課題を東アジアの人々と共有し、ともに未来に向けて解決するためのリーダーシップを有する。

[illegible][illegible]

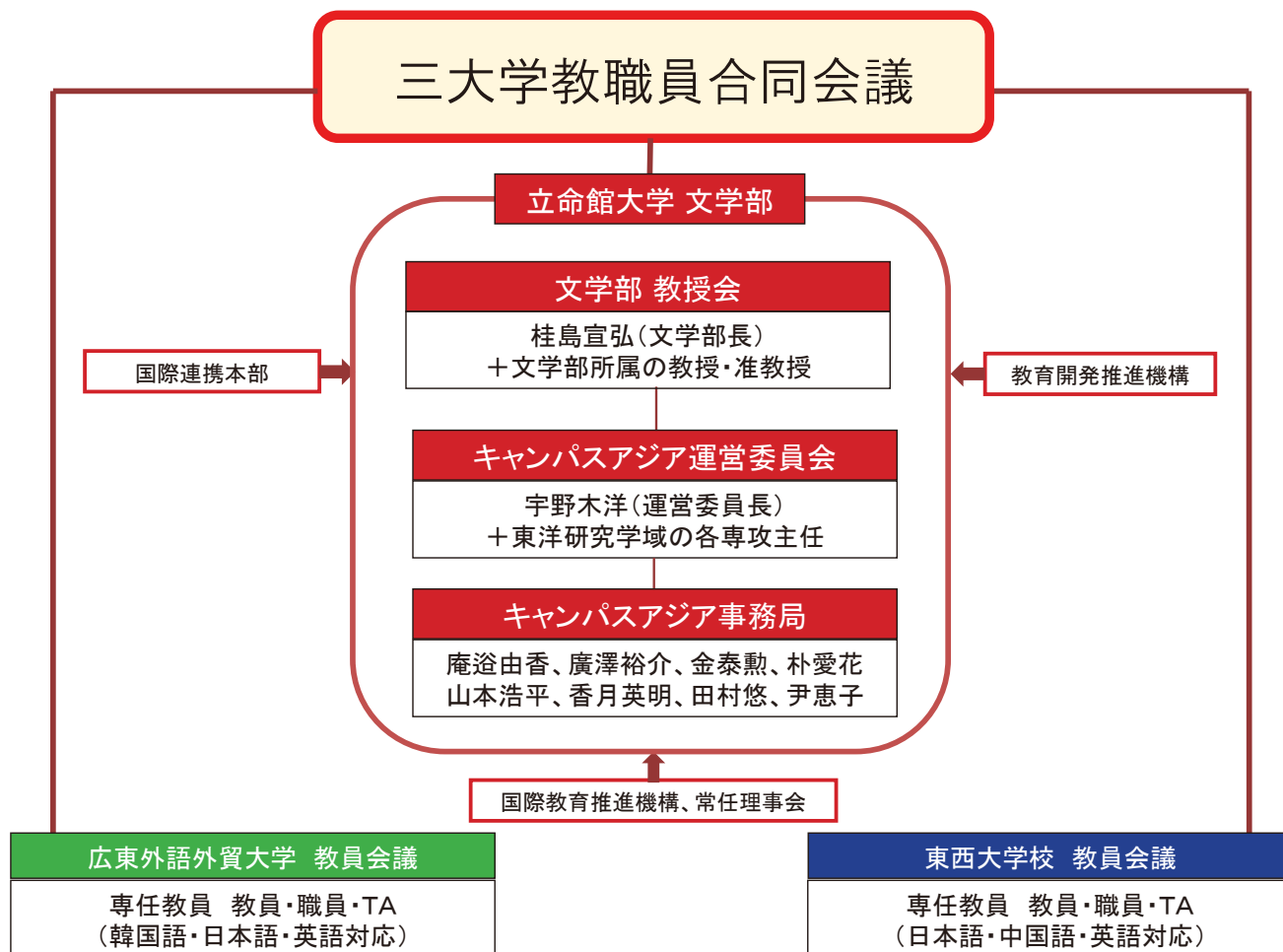
【登録必須科目】必ず登録・受講しなければならない科目の一覧

【注】2011年に同の講義は、実加時間・科目名を変更することがあります。

※ 第一外国語や第二外国語としての単位には含まれません。

第2 第一外国語や第二外国語は中国語／韓国語を選択していない場合は、別の専門科目に読み替えます。

※3 使用言語はインターンシップ失により異なります。



運営組織 構成員

文学部 教授会	桂島宣弘 教授(文学部長) ほか、文学部所属 教授・准教授
キャンパスアジア運営委員会	宇野木洋 教授(文学部副学部長) 芳村弘道 教授(中国文学専攻主任) 鷹取祐司 教授(東洋史学専攻主任) 佐々充昭 教授(現代東アジア・言語文化専攻主任) 稲森裕実 (文学部事務室事務長)
キャンパスアジア事務局	廣澤裕介 准教授(プログラム・マネージャー) 庵逄由香 准教授(プログラム・マネージャー) 金泰勲 講師(キャンパスアジア担当教員) 朴愛花 講師(キャンパスアジア担当教員) 山本浩平 (キャンパスアジア担当職員) 香月英明 (キャンパスアジア担当職員) 田村悠 (キャンパスアジア担当職員) 尹恵子 (キャンパスアジア担当職員)